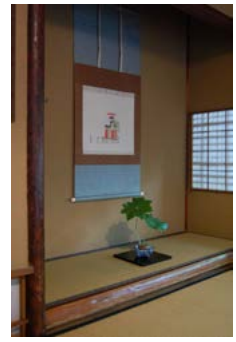
床の間のこと

床の間の花の置き方について基本的なことをまとめてみる。



右の写真は私の家の茶室の床で、床柱の右に床があるので上座床（本勝手の床）である。床柱の左側に床があれば下座床（逆勝手の床）になる。

この本勝手の床には本勝手の花を床柱に寄せていけるのが一般的である。（右の若松と椿の生花のように）

もともと床には床柱と反対側に書院が付いていて、外の光を障子越しに取り込む明かり口の役目があり、床柱側に花を置いた方が明かりを受ける形になって収まりも良い。

ただし、その逆に明かり口側（上座）に花を置き、上座に座った客が花をゆっくりと観賞できるようにとの配慮がなされることもある。つまり先ほどの考え方とは逆になる。また現代では明かり口が無かったり幅の狭い床も多く、花の位置は床の大きさや花の大きさ、花型によって柔軟に考えて飾ればいいだろう。

右か左かは置いておくとして、床の間に花を飾る場合の心得を書いておこう。

掛物には横物（横軸）と竪物（立軸）のふたつがあり、横物のときは掛花か、軸の下（床の中央）に花を置く。竪物ならば花は脇へ譲って置くのが基本である。

また掛物に書かれた花をいけることは避け、人物が描かれていればその顔に枝がかからないように、名や印を隠さないように注意する。

置花生は畳床には薄板を敷き、板床ならば直に置く。

「本床」は床柱には面取りした角材を用い、床框は床柱と共木の漆塗りで付書院があり、床脇に違い棚がある。

床板と畳の上面を揃えた「踏込み床」、畳より床板の上面を高くした「蹴込み床」のほか、「琵琶床」、「洞床」、「袋床」、「釣床」、「置き床」（移動できる簡易な床）などの様式がある。

さらに茶道では掛け軸のほかに香炉や香合を飾ったときは花入れを置かない決まりがある。

鴇色

仙溪

日本で野生の鴇が姿を消してから十年が経つ。以前は日本各地に飛来していたので、「鴇色」という色名が鴇が羽を広げたときに見える風切羽の薄紅色からきているのを知る人も多かっただろうが、恥ずかしながら私は鴇色がいったいどんな色かも知らなかった。

先日の名古屋での稽古の時にSさんが庭に咲いた牡丹の色が鴇色なのだと教えてくださり、別の人は若い女性の小袖に鴇色が多いという話しをされていて、なんとなく可愛い明るいピンク色を想像することができた。

調べてみると江戸時代の染色指南書「手鑑模様節用」に「とき羽色一名志ののめいろ」とあって、東雲色と同色であるとされている。また二葉亭四迷の「浮雲」には、十八才のお勢が黄八丈の小袖に藍鼠の帯、帯上に時色縮緬という姿で菊見に出かける様子が書かれている。「時色（鴇色）」や「藍鼠」という色がどんな色なのか、「黄八丈」がどんな織物なのか知っている人はどれくらいいるのだろう。日本の伝統文化から色名が消えてしまっては楽しみが半減してしまう。色名の原点は染色にあり、着物文化で次の世代に引き継いでいかねば消えてしまう。

日本から野生の鴇は消えてしまったけれど、色名としては残っていってほしい。

ビッグイシュー日本版「生き残りのしくみ」

春、植物の生き方に学ぶ

月に二回、京都の三条大橋東詰で「ビッグイシュー日本版」を買うのを楽しみにしている。「ビッグイシュー」は書店ではなく路上の販売員さんから買う。ホームレスの自立支援のために一九九一年にイギリスで発行が始まったもので、代金の半額強が販売員の収入になる。日本でも二〇〇三年から発行されている。

もちろん支援の気持ちもあるが、中身がいいのも購入理由の一つだ。経済学者の浜矩子氏と作家の雨宮処凛氏のコラムが好きだ。映画俳優のインタビューもかなり踏み込んだ内容。そして特集記事の中には今の時代と向き合う内容のものが多い。

四月一日号の特集は表題のような植物にまつわるあれこれで、大変興味深かったので一部をここで紹介しておきたい。

まずはじめに生物学者の田中修氏(甲南大学理工学部教授)からのメッセージを。

「植物たちは、いつでも、どこにでもいます。でも、見飽きるということはありません。何も悪いことはしないし、嫌なことも言いません。その上、ときとして、喜びや感動を与えてくれます。」

「そんな植物たちは、私たちと同じ生き物であり、同じしくみで生き、同じ悩みをもち、その悩みを解くために毎日がんばって努力しているのです。」

「植物たちは、その祖先が海から上陸して以来、約四億年間を生き抜いてきています。生きるために巧みなしくみを工夫し、不都合な環境に耐え、逆境をはね返してきました。」

「ですから、その生き方には、私たちが励まし勇気づけられることや、慰め癒されることや、新しい意欲を掻き立てられることなどが多くあるはずです。」

ワクワクするメッセージではないか。内容は次の六つの章に分かれている。

一章 「自力で生きられる植物。そしてすべての動物を養う」
二章 「病気への生き残り戦略。多様な子孫を残すこと。」
三章 「毒による護身術」 体内に独自の毒をもつ植物たち
四章 「太陽の光とたたかう」 アントシアニンとカロテンで装う
五章 「逆境を生きのびる術」 変幻自在、たくましい植物の生き方
六章 「命を次代につなぐ多様な工夫」 タネ、自家受精、ハカラメ、地下茎

では一章から順に内容の一部を紹介したい。

自力で生きられる植物。そしてすべての動物を養う

四十億年前、地球上の最初の生命は、海の中に何億年もかかって貯められていったスープのような栄養物を食べて生きていた、つまり動物的な生き方をしていた。

ところがやがて栄養物は食べつくされて生命が絶滅の危機に瀕した時に、それを救ったのが植物の祖先だった。食糧がないのなら自分でつくろう、という植物的な生き方が出てきたのだ。

その後、海の中の一番上層にいた緑藻類が波で打ち上げられて、陸上で生活をはじめたのが約四億年前で、動物もそれを追って約三億年前に陸にあがってきた。

植物たちは根から吸った水と空気中の二酸化炭素を材料に、太陽の光を使って自分の葉っぱでブドウ糖やデンプンをつくる。そして窒素という養分を地中から取り込んでアミノ酸をつくり、それを組み合わせて、自分に必要なタンパク質、脂肪、ビタミンなどもつくることができる。一歩も動かずして、自分自身で必要な栄養をすべてつくり出す能力を備えているのだ。

このようなことは私たち動物から見れば魔法のようなことである。

(次号でも続けて紹介します)

テキスト 600
2013 年 6 月

これからのいけばな

京都新聞「日本人の忘れもの」にも書いたことだが、自然の恵みを受けて生かされていることに感謝し、先人が培ってきた自然との関わり方を「学び磨いて生かし伝える」ことの大切さを痛感している。私達は自然に生かされて豊かな心を養ってきたのだ。

私が小さい頃のおじいちゃん、おばあちゃんは、自然との関わり方を沢山知っていた。今でも友人の中には子供と一緒に山菜を摘んで食べる楽しみを知っていたり、草で笛を器用に作れたりするのがいるが、そういう経験こそ豊かなことだと思う。

ある小学校では校長先生自ら校庭にできた実をもいで食べ、子供達がこっそり真似をするようにしている。随分植物への関心が高くなってきたそうだ。素敵な校長先生である。

植物の中には毒をもつものもあるので関わり方を間違うとひどい目に遭うが、昔からの自然との関わり方には知恵がいっぱいつまっている。食べること、遊ぶこと、薬にすること、ものをつくること、芸術を生み出すこと、そしていけること。

いけばなは植物との関わりを深めるだけでなく、いける喜びやもてなす楽しみがある。いいいけばなは心地よい「和」を生んでくれる。人と人との心をつないでくれる。そういうこともいけばなの大切な役割だと思う。

ビッグイシュー日本版「生き残りのしくみ」②

植物が動物を養っている、といっても食べつくされては困るので、植物それぞれに独自の工夫をして自己防衛をしている。「渋み」「辛み」「苦み」「えぐみ」「酸み」などもその自己防衛の現れだ。

例えば柿の実は中のタネができあがるまで虫や鳥には食べられないように「渋み」をもっている。やがてタネができると「渋み」は無くなって甘くなる。

「タデ食う虫も好き好き」というように、たとえ辛いタデを好んで食べる虫がいるとしても、植物も動物も、それぞれに棲み分けをして好みを分散することで生きていけるのだ。

「競争したらどちらかが滅んでしまう。生物はちょっとだけでも嗜好が違うと、どこかで生きていけるんですよ。」（田中修先生）

病気への生き残り戦略 多様な子孫を残すこと

桜餅の甘い香りのもとは、虫を撃退するためにサクラが用意したクマリンという物質である。サクラの葉にはクマリンになる前の物質と触媒になる物質が別々に存在していて、虫がかじることでこの二つの物質が出合い、反応が進んでやがて香りがでてくる仕組みになっている。

他にもクスノキの葉を傷つけると芳香を放つことはよく知られている。（防虫剤に利用→樟脳（しょうのう））

またマツやヒノキなどの針葉樹はカビや病原菌を遠ざけるために香りを放っている。私たちはそれを爽やかな香りとして感じて「森林浴」を楽しんでいる。このような植物が放つ香りは総称として「フィトンチッド」と呼ばれている。

「植物は突然変異を繰り返し、ここまで進化してきた。ある植物の原産地を調べると、その種が生きられるぎりぎりの環境であることが多い。ヒノキもあの香りを出したから原産地で生き残ってこられたんだと思う。その後人間があちこちに移植して増えたわけです。」（田中先生）

さらに植物は怪我をするとかさぶたをつくって身を守る。バナナやリンゴを切ると表面が褐色に変わるのもその一つで、これはもともと紫外線の害を消すために植物の中にあるポリフェノールが酸素と反応して固まったもの。

タラヨウ（別名・ハガキノキ）の葉に釘などの尖ったもので文字を書くと、しばらくしてからくっきりと黒く浮き上がってくるのも同じ原理だ。

植物にとって多様な子孫を残すことが病気に対する最大の生き残り戦略であり、そのためにいろんな知恵をしぼってきた。（次号へつづく）

テキスト 601
2013 年 7 月

グランドマスター

「グランドマスター」という映画を観た。近代の中国武術継承者たちがどのように生きたかが描かれている。ぐつぐつと煮える蛇のスープを前にして、火に新たな薪を入れるかどうかを語りながら、武術界の舵取りを話し合うところが面白かった。火が強いと焦がしてしまうし、弱いと本来の味がでない。武術の神髄を伝承するために、新しい息吹を加えることが良い選択なのかどうか、武術界のトップは苦悩する。

中国武術の門派は四百以上あるそうだが、その中の一つ詠春拳の継承者の一人、葉問（イップマン）が映画では中心的存在になっている。詠春拳は中国南部に伝わる武術で、技の型は「小念頭」「尋橋」「標指」のわずかに三つ。この基本を修練することで自然に体が反応して相手の攻撃を防御する。

いけばなは武術のような戦いではないので比べるのはおかしいが、稽古を重ねて技と心を体得することや、その神髄を身につけて次へ伝えることに悩むのは同じだと感じた。

いけばなにとって「この三つのことを身につけよ」というようなものは何だろう。いろんなことが思い浮かぶが、つきつめていえば次の三つを探求することになると思う。

「心」と
「技」と
「美の感覚」。

日本人の忘れもの

NIHONJIN NO WASUREMONO

第2部　44

忘＝筆　森清範　清水寺貫主

いけばなの心

成すべきことを真剣に考え、変えるべきことは

桑原仙溪
桑原専慶流家元

結婚を決めた相手は、江戸時代から続く花道家元の娘であった。それが私がいけばなを習うきっかけとなり、心の中の美を形にする父と、おおらかに花と向き合う母と、もてなしの気持ちを伝える妻とともに、花の道を歩んできた。

いけばなとは。シンプルに言えば、地に根を張って立つ木や草花から一部を切り取って水を入れた器にいけることなのだが、それらが「いい表情を見せてくれる」には、それなりの経験の

しかし、その半面もっと気楽に、身近に花をいけてほしいとも強く願う。心のこもったいけばなは、人の心を和ませる。花がいけてあると自分もまわりの人もほっとする。部屋の空気ががらりと変わる。そんないけばなの力を知ってほしいし、もっと暮らしに活用してほしい。

私が花をいけるとき「自然の息吹を敬う」気持ちを大事にしている。

花に新たな命を吹き込み「生かす」ことを考え、構想する家元。(2011年11月／流展)

ドイツ・テテロー市775年記念祭典にて花をいける家元と桑原櫻子副家元。(2010年5月／聖ペテロ・パウロ教会)

私たちは自然に生かされ、豊かな心を養ってきた

いけばなに限らず、多くの芸術・文化は自然との関わりの中で生まれ育ま

けばなである。

花の茎を水の中で切ると、ぐぐっと水を吸い上げる。葉に霧を吹いて手で広げるとしゃんとする。束をほどいて枝を本来の姿にもどすと気持ちがいい。若松の幹を手で磨き古い葉を取り去ると輝いてくる。「生かす」ために花や木に触れるうちに自然と心を通わせているのに気付く。いけばなを習って良かったと思う瞬間である。花を習っていなかったら、松の枯葉を掃除したあとの清々しさを味わうこともなかっただろう。

変える時がきている。

もっと気楽に身近に花をいけてほしい

積み重ねが必要となる。ところが一年に一度しかいけられないような花材もあるうえに、何十何百という種類の植物を相手にするので生涯修業は続く。また花材のとり合わせ、花器の選択によって良くもなり悪くもなるので、自分自身の美の感覚を磨くことも大切。古典様式の「立花」には九つの役枝があって立てるのに一日かかったりする。花道は奥が深い。

生き生きとした花や味わい深い枝は、大地・風雨・太陽が育み、そこに人の手が加わって私たちの手元に届く。虫や鳥も関わっている。そんな花に、新たな命を吹き込んで「生かす」のがいれてきた。私たちは自然に生かされ、豊かな心を養ってきたのだ。自然の恵みを受けて生かされていることに感謝し、先人が培ってきた自然との関わり方を「学び磨いて生かし伝える」ことが大事だと思う。

2年前の大震災で、自分の成すべきことを、あらためて考えた人は多かった。福島の原発事故によって原子力の恐ろしさに気付いた人も多かったはずである。安易に電気を得る代償に美しい豊かな自然との関わりが断ち切られてしまったのだ。放射能による内部被曝はこれからどんな影響を及ぼすか知れない。放射性廃棄物の処理もままならない。このことに私たちはもっと絶望すべきだ。そして、成すべきことを真剣に考え、変えるべきことは変える時がきている。子どもたちの未来のために。人も含めた美しい自然を損なわないために。

古典様式の「立花」には九つの役枝がある。松一色立花／桑原仙溪　写真＝宇佐美宏

◉くわはら・せんけい
1961年、大阪市生まれ。80年、桑原専慶流に入門。84年、同志社大工学部卒業。同年、同流14世家元長女櫻子と結婚、家元を補佐しながら教授活動を開始。2004年、15世家元襲名。日本いけばな芸術協会理事、京都いけばな協会副会長。

京都新聞4月28日(日)に掲載された『日本人の忘れもの』第2部44」の紙面より転載。（カラー面）

ビッグイシュー日本版「生き残りのしくみ」③

前号で「多様な子孫を残すことが植物にとっての生き残り戦略」と紹介したが、その逆を行くのが性質を画一化した栽培作物だという指摘もなされていた。作物の疫病が大飢饉をもたらした事例も多い。大規模農業への警鐘ととらえることもできる。植物が本来持っている生き残るための力を生かした多様な農業の価値を見直すべきではないだろうか。

再び「ビックイシュー日本版212号」より生物学者田中修氏による特集内容の紹介を続ける。

毒による独自の護身術

「季節感を出そうとアジサイの葉っぱを食べ物に添えた飲食店で食中毒事件が起きたり、フランスではキョウチクトウの枝でバーベキューをして死者が出たり、またスイセンの葉っぱはニラと似ているため誤って食べて食中毒をおこす事例もあります」

アジサイの葉には青酸を含む物質が、キョウチクトウにはオレアンドリン、スイセンにはリコリンという有毒物質が含まれる。

虫や動物たちに食べつくされないようにとそれぞれ独自の構造の毒（有毒物質）を持つようになった植物。まさに彼らは〝化学者〟だ。

そんな植物の毒を逆に利用する動物もいる。オーストラリアのコアラは、ユーカリの葉に含まれている青酸を無毒化する細菌を腸に棲まわせているので、ユーカリの葉をほぼ独占的に食べて生きていける。ただし生まれたばかりのコアラにはこの細菌はいないので、親の糞を食べて腸に細菌をとりこむ。

ヒトも植物の毒とは古より深く関わってきた。

江戸後期の外科医・華岡青洲は植物由来の有毒物質で全身麻酔をし、乳がんの手術を成功させたことで知られている。

ヒガンバナはよく墓地や田畑の畦道に植えられるが、これはヒガンバナに含まれる有毒物質リコリンによって、モグラやネズミを寄せつけなくするという先人の知恵。またヒガンバナの球根は水にさらして毒を抜けば食べられるので、作物の不作の年に飢えをしのぐ救荒植物としての役目もあった。

私たちは毒のある植物とともに生きる知恵を身につけた先人たちのおかげを多く受けている。

また野菜として出回っているものにも少なからず有毒物質は含まれている。例えばジャガイモの芽に含まれるソラニン、ギンナンのギンゴトキシン、モロヘイヤの種に含まれるストロフェチジンなど。果物の女王マンゴーは種の周りの果肉にあるマンゴールが皮膚をかぶれさせるので品良く食べよう。（次号へつづく）

直心道場（じきしんどうじょう）

今は掛けていないが、長い間、家の玄関の間には「直心道場」の書が額装で掛けられていた。昔の「テキスト」を見返していて、家元宅での師範認証式の写真に写っていたので思い出したわけだが、書の意味について調べてみた。

もともとは「直心是道場」からとられていると思われるが、これは維摩経（ゆいまきょう）というお経の中に出てくる言葉である。

昔、光厳童子が毘耶離の城門を出て、閑寂の境に修行の道場を求めようとしていたとき、維摩居士（ゆいまこじ）が城に入って来るのに出会った。光厳童子が「どこからお帰りになられたのですか」と尋ねると、居士は「今、道場から帰るところです」とのこと、そこで「実は私は閑寂な道場を探しているのですが、居士が行かれた道場はどこにあるのですか、ぜひ教えてください」という問いに「道場は外に求むるに及ばぬ。直心是道場、虚仮（こけ）なきが故に」と喝破されたという。

「素直な心に偽りはない、そこにこそ道場はある」と言い換えることができると思うが、師匠も弟子も、この「素直な心」についてよくよく考えて稽古するならば、おのずといけばなの心に近づけるのではないかと思う。さて、「花をいける素直な心」とは。自問自答中。

ビッグイシュー日本版「生き残りのしくみ」④

父も以前、テキストで書いていたが、花の色にはそれなりの理由があるのだ。先月につづいて「ビッグイシュー日本版212号」より、生物学者田中修氏による植物のあれこれを紹介する。

太陽の光とたたかう

植物は太陽が大好き!と思いがちだが、実際にはまぶしすぎる太陽の光に対しての防御手段もとっているのだ。

「昼間の太陽はだいたい10万ルクスの明るさがあるんですが、光合成する材料となる空気中の二酸化炭素が0・04パーセントしかなくて、せいぜい3万ルクスぐらいしか使えない。残り7万ルクスのエネルギーは行き場がなくなってしまい、酸素と反応して活性酸素が生まれてしまう。」

「植物に紫外線が当たったら、猛毒の活性酸素が生まれます。たとえばオキシドールという消毒液がありますが、あれは過酸化水素水で活性酸素のごく薄い液ですが、それで菌が死ぬ。パラコートという除草剤も、活性酸素で植物を枯らします。」

この猛毒の活性酸素に対抗するために、植物は自分で「抗酸化物質」をつくっている。その代表がビタミンEとビタミンCで、これらが活性酸素を消してくれる。

また、植物が咲かせる「花」の色も抗酸化物質と関係があるのだ。もちろん受粉のために昆虫や鳥を呼び寄せる目的もあるが、同時に紫外線対策のためでもある。

「植物たちは太陽の紫外線が降りそそぐ中で成長し、花は子孫をつくります。花の中で生まれてくる子どもたち、つまりタネを守るため、アントシアニンとカロテンという二大色素を使って活性酸素に対抗しつつ花びらを美しく装っているんです。」

これらの二大色素は典型的な抗酸化物質だ。

バラ、アサガオ、シクラメン、サツキツツジなどの花はアントシアニンという色素で装っている。これは赤と青の花を咲かせる。

キク、タンポポ、マリーゴールドなどの花はカロテンという色素で装っている。これは赤や橙、黄色の花を咲かせる。

紫外線が強く、強い光のところでは、花の色や果物の色がどんどん濃くなるのも植物の防衛本能のあらわれなのだ。

私たち人間も紫外線に当たったりすることで活性酸素が発生するが、果物や野菜からビタミンCやEをとることで対抗できる。またブルーベリーのアントシアニンは目にいいなど、さまざまな植物の能力の恩恵を受けている。植物の働きぶりに感謝しなければならない。（次号へ）

二種でいける　仙溪

今月の「テキスト」に掲載した8作（蓮の立花をのぞく）はすべて二種の花材でいけている。

普段の稽古では三種類の花材の組み合わせでいけることが多い。主材となる枝に花をとり合わせて、さらに小花をもう一種という感じだ。三種類目の花材で色彩を深めたり補ったりする。あるいは季節感を強めたりもできる。

三種のいけばなが身についてきたら、二種でいけてみるといい。

二種の花材だけでいけようとすると、花器の選択が三種よりも難しいと感じるだろう。またいけ方も高度な技量が必要になる。二種でも見応えのあるいけばなにするには相当工夫しないといけない。とてもいい勉強になる。

ビッグイシュー日本版「生き残りのしくみ」⑤

先月につづいて「ビッグイシュー日本版212号」より、生物学者田中修氏による植物のあれこれを紹介する。

逆境を生きのびる術

暑さに強い植物は体を冷やす工夫をし、乾燥地の植物は水分の蒸発を少なくする工夫をし、寒さに強い植物は凍りにくくする工夫をしている。

「夏に育つ植物たちは、私たちが汗をかくのとまったく同じ仕組みで、葉っぱの気孔という穴から水を蒸発させて体を冷やしています。」

「ですが、サボテンなどの多肉植物は乾燥した砂漠地帯出身なので、水の蒸発を防ぎたい。だから、夜の間に気孔から二酸化炭素を取り込み、葉に蓄えて日中の光合成に備え、昼はなるべく気孔を閉じているんです。そうやって水の消費を節約して生きているんです。」

「寒さ対策は、まず凍らない性質を身につけないといけないんです。ですから、常緑樹なんかは冬に備えて少しずつ少しずつ糖分などをからだに備えていくんですよ。」

「寒い冬を通り越した大根、白菜、キャベツは甘いと言われますよね。ハウス物のホウレンソウも出荷前に一定期間寒風にさらして甘みを増すそうです。栗なんかも冷蔵庫にいれておくと甘くなるんですよ。」

「猛暑が苦手な植物は春に花を咲かせて枯れ、夏はタネという形でやり過ごす。極寒に弱いものは秋に既にタネになっているのです。」

植物は日々の糧を手に入れるために独特の進化を遂げたものもある。

ハエトリソウは北アメリカ出身で、窒素などの養分をあまり含まないやせた土地だったために、虫のからだから窒素を含んだ物質を摂取する能力を身につけた。

「そうまでしてどうしてやせた土地でいきていくのか？と思われるかもしれませんね。でもやせた土地だと、他の植物は棲めないため、競争がない。だから、こういう能力をみにつけてでもハエトリソウは、この地で生きていくことを決めたんでしょうね。」

ネナシカズラは根がなく、他の植物の茎に巻きついて吸い付くように突起が伸び、その植物から栄養を奪う寄生植物。

「でもネナシカズラは決して宿主が枯れるほどには栄養を奪わない。自分の生き方を知り、わきまえを心得ている。」

ピーナッツは南米、ブラジルあたりが原産で、河原近くの砂地を好む。かさかさの殻はなんのため？。

「大雨の後で増水すれば、他の植物は流されまいとするんでしょうが、ピーナッツは『チャンス！』とばかりに流されていくんです。あのサヤはカサカサなので、水に浮かぶでしょう。そして、流れ着いた新天地ですくすくと生育していくんです。そうして生育地を広げて生き抜いてきました。」（次号へつづく）

流祖の時代より

近松門左衛門
「聖徳太子繪傳記」

近松門左衛門は、江戸時代に上方（京都・大坂）で活躍した人形浄瑠璃の作者である。承応二年（一六五三年）から享保九年（一七二四年）までの七十二年の生涯で、百作以上の浄瑠璃を執筆し、歌舞伎にも作品を残している。

浄瑠璃の一つに「聖徳太子繪傳記」というのがあり、その中に立花が出てくる。話のあらすじは次のようなものだ。

用明天皇の皇子として生まれた聖徳太子は仏法に帰依し、排斥派の物部守屋の母が仏法をののしった時も不思議を見せ、改心させる。母は自害して守屋を仏法に入るように勧めるが、守屋は拒絶して反逆し、太子方と争う。帝や北の方を奪い幽閉などした守屋を、太子は河内国稲村城に攻めて、これを滅ぼす。（以上、廣田隼夫氏のＨＰ「近松門左衛門でございー」より転載）

さて、立花のくだりは、物部守屋の母が、息子の守屋に自分の仏法への改心を受け入れさせる方法として、聖徳太子から「毎月六齋日、草木の花を瓶に活け、諸天に祭り供養せよ、凡そ立花の功徳には、草木成仏の因縁花散り葉落るにも聲聞無常の悟あり、粧ひ立て色々に咲き匂ふ花を見る時は、濁る心も清やかに怒りなく恨みなく天人の歓楽花にあり、いかに放逸の守屋も花には心やはらぐべし、その時出家の姿を見せ、仏道に誘引せよ」と教えられ、はたして守屋は立花の会のようなものを催すこととなるのだが・・・。

そこでの立花の描写を抜き出して、ここに書き写してみる。

あしの心、柳の副、前置に寒菊、正眞の鶏頭に少し色を持たせてしやれ、木の取合せ、

南天の心、正眞のしをん、りんどうのあしらひ、胴にいぶきのうつりのよさ、

松の心、正眞の燕子花、枇杷の葉をつかふたり、控の柏梅戻の受、見越の檜葉、

青葉まじりの紅葉の心、なかし控の取合、正真の菊、どれもどれもよう出来たとほめ囃す、

そして「眞の立花」と題して次のような描写をしている。

是々御覧せ、是ぞ此神に手向の眞の花の数、ゆがまず直なる心の竹を立初る一二の枝の房やかに、茂る葉がさね呉竹の世々を重ぬる例也、正眞は水仙に、陰と陽とのつがひ葉は、ここに口傳と岩戸を表し、めぐみの露を貝口にうけて、諸願も成就の神、影向の枝とかや受そへは、殘んの菊籬のもとに手折りて、ゆうゆうとして南山を、見しは唐土日の本の、朝日のてり葉、はまきして、君がため鐵しつはりと撓める露に戀をもつ、しぐれも霜も降らば降れ、ながしの松は深緑、じつと控の若緑、見せばや鶴も我宿と、千代に八千代に苔衣、哀れの枯木を胴つくり、雪を出たる早咲の梅こそ谷のうつりにて、水際きよき花の影、何に譬へん唐絵の屏風よ、なぜなぜたてて見たれば面白や、木立枝ふりつりもよく、峰を見こしの松の葉に月をも宿す景色あり、木々も草葉も縁切れず、夫婦の縁も結び合ひ、長うそへとや副下にまくらかり葉のしやがはねよげのあいしらひ、おなじ青葉も濃き薄き、わけて浅黄と紺こんるりの葉がくれに、珊瑚の玉をもり上ぐる、おもとは三がのまへおきに、口傳あるぞとしら玉椿、八千秋を祝ひこめ、野菊澤菊さし混ぜて左草とめ右木とめ、雨露のそめ葉の芳しく、造花の手業仇ならず、おのづからなる風情には、見あぐる山の陰繁み、見おろす谷の奥深く、浅澤小野の水わけて、千代を見せたる竹の節、非常も心あり顔に、さしかこひたる立花の作意、天も納受人楽みようえん風流のもてあそび、月花わかぬもの迄も、あつと感じて詠めけり、

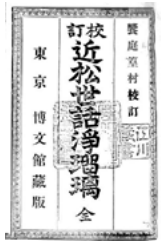
なんと素晴らしい描写だろう。少し意味のわかりかねるところもあるが、立花に対して造詣が深くないと描けない文章である。聖徳太子の時代はまだ立花は生まれていないはずなので、近松の創作として歴史の中に立花を道具として組み込んだものと思われるが、それにしてもこの詳しさはどうだろう。

流祖、冨春軒仙溪の「立花時勢粧」が世に出た貞享五年（一六八八年）には、近松三十五歳。同じ京都の地で仙溪も近松も過ごしていたことになる。

その頃、立花の会が競うように催されて、その評判を反映して近松は立花を話に組み込んだのだと思う。「立花時勢粧」もおそらく参考にしたのではないだろうか。

人形浄瑠璃の演目に立花について見事な言い回しがあれば、観客も立花にさらに興味を持ったに違いない。立花の功徳を聖徳太子に語らせているところにも注目したい。

参考



ビッグイシュー日本版「生き残りのしくみ」⑥

１９５１年、千葉県にある落合遺跡（縄文時代の船だまりと推測される）からハスの花托が出土し、植物学者の大賀一郎博士によってハスのタネの発掘調査が行われ、地下６ｍの泥炭層からハスのタネ３個が見つかった。

二千年前の弥生時代のハスのタネは、その年発芽して、翌年には美しい桃色の花を咲かせた。

植物の生命力の強さに脱帽である。

先月につづいて「ビッグイシュー日本版212号」より、生物学者田中修氏による植物のあれこれを紹介する。最終回。

命を次代につなぐ多様な工夫

二千年の眠りから目覚めた「大賀ハス」のほかにも、ツタンカーメンの墓から発掘されたと言われる「エンドウマメ」。弥生時代の遺跡で見つかったとされる「古代コブシ」。室町時代の遺跡から見つかった「ツバキ」や「シラカシ」などが息を吹き返している。植物の人生計画は無限のようにも思える。

「タネは発芽にものすごく用心深いんです。発芽には、温度・水・酸素の３条件が揃わないとダメだけれど、それに加えて70パーセント以上のタネの発芽には光も必要。太陽の光の中でも光合成がしやすい赤色の光が当たるのを、ちゃんと感じてから発芽します。タネは慎重に、すごい能力を背負いながら命をつないできたんです。」

タネ以外にも植物は工夫をしている。「交配するために虫に来てもらうには、密や香りをつくるコストがかかります。いざというときにも子孫を残せるよう、保険をかけるように進化したのが『自家受精』できる植物です。例えばスミレには花が開かない蕾があって、中ではいつのまにかタネがいっぱいできている。私たちが食べているお米や麦、大豆もそうした自家受精の性質を利用して品種改良したから、籾（もみ）や莢（さや）ができると空っぽということがないんです。」

ほかにも熱帯地方のマザー・リーフは、葉っぱの縁にあるギザギザから根や芽を生やし、『ハカラメ』とも呼ばれています。」

植物にとって一番安心な生き方とも言えるのが、地下茎をもつこと。ヒルガオ、ワラビ、タケノコなどだ。「土の中に潜っていたら温度もそんなに変動しないし、地上で芽を出してうまいこと育つことができればそれでいい。」

「最近ツクシが少なくなってきた。ビルや道路の建設で土を掘り起こしてしまうからです。土ごと掘り起こされてしまったら、地下茎を生やしていても生きていけません。」

植物は約４億年前から陸上にいて、人間が現れたのはたかだか何十～百万年前。それなのに地球を自分たちの土地みたいにしていないか。私たちはここで箸を置き、目の前のニンジンやキャベツにも感謝の気持ちをつたえるべきかもしれない。

「植物は、水と二酸化炭素と太陽の光で、自分たちの食べ物をちゃんとつくって、本当にきれいな生き方をしてる。動物は食べ物や配偶者を探してうろうろ動き回るけれど、もし植物が動いて、本気で逃げ回ったら、…。私たち動物はいきていけないだろうねえ。」

おわり

冷たい風

仙溪

中庭の山茶花がいつのまにか枝いっぱいに咲いて目を楽しませてくれている。

寒い季節がやってきた。父が亡くなって一年。振り返ると多くのことが頭をよぎる。けれども、去年は二度訪れた東北も、今年は一度も行かなかった。東北の冬は長く厳しい。

毎日お風呂に入れて、温かな食事ができることを幸せに思う。できれば来年はまた仲間と行ってきたい。花は人の気持ちに優しく寄り添ってくれる。

畑を耕し、収穫して暮らしの糧を得る。漁をしたり、ものを作ったり売ったりして私たちは生きてきた。そんな素朴な営みができなくなってしまった人が増えている。

原発事故はあるはずのないことだった。日本には54もの原発があり、ほとんどが都会から遠く離れたところにつくられ、都市も地方もその現状に甘んじている。人の欲が生んだ金融危機の影響も大きい。世界各地の紛争も絶えない。

個人ではどうしようもない大きな流れに、知らぬ間に押し流されようとしている気がする。しっかり足を地に着けて、自分で考えることをしないと、おかしなところへ連れて行かれていることすら気づけない。

温かな部屋にいても、冷たい風の、あのつらさ痛さを想像して、自分にできることをしていきたい。

西洋館に秋を彩る

桑原専慶流関東支部いけばな展

11月23日(土)～24日(日)
横浜山手・外交官の家　出品者20名
家元ブログではカラーで御覧いただけます。

ウェルカムいけばな

～心地よい空間～

あなたは何のために花をいけるのか。と問われたら何と答えますか。

「自分の美の世界をいけばなで表現したい」

「いけた花が新たな命をふきこまれて輝いてくれるのが好き」

「とにかく花をいけると心がおちつき、豊かな気持ちになれる」

ただ花をいけるということにも、人それぞれに色んな思いがある。

また、「今日はお客様がこられるから、花屋さんで花を買っていけておこうかしら」というような素朴な気持ちで花をいけることもあるだろう。訪れたお宅に花がいけてあると、やはり嬉しい。大切にいけられた花からご主人のもてなしの気持ちが伝わってくるし、なによりもその部屋にいるのが心地よい。

以前、フランス北部のノルマンディーに大きな風景式庭園を持つ貴族のお宅にお邪魔したことがある。その時通された居間に、庭から切ってきたコブシの大きな枝がそのままの姿で壺にいけられてあった。アールデコ調の大きな明かり窓からさす光と、無数のコブシの白い花が強く印象に残っている。

花がいけてあることで、その場がとても居心地のいい空間になる。別の言い方をすれば、花がいけられていることで、その場に心地よく迎えられたような気持ちにさせてくれる。それこそいけばなの大きな魅力の一つだと思うのだ。

関東支部の皆さんと横浜山手にある西洋館を花で飾る催しは、今回で4回目になる。横浜の佐藤慶真先生がいつもボランティアで花を飾ってこられたご縁で、2日間の花会をさせていただいた。従来のいけばな展ではなく、あくまでも来館者を迎える花として。

今回お世話になったのは「外交官の家」と呼ばれる洋館。ニューヨーク総領事やトルコ特命全権大使などをつとめた明治政府の外交官内田定槌氏の邸宅で、もとは東京渋谷の南平台に明治43年に建てられた。設計者はアメリカ人で立教学校の教師として来日、その後建築家として活躍したJ.M.ガーディナー。京都の長楽館（旧村井別邸）もガーディナーの設計だ。

平成9年に横浜市は、内田定槌氏の孫からこの館の寄贈を受け、山手イタリア山庭園に移築復元し一般公開した。同年、国の重要文化財に指定されている。

驚かされるのは丁寧な復元だけでなく、室内の家具や調度類も再現されていることだ。聞くところによるとカーテン一つとっても、使われていたのと同じものを特別に京都の龍村織物でつくってもら

うほどの念の入れようだったそうだ。まさに当時の外交官の暮らしを体験できるように、との熱い思いがこもっている。

特別な思いのこもった館内だからこそ、家具には「手を触れないでください」という札が置かれている。無料で一般公開されているのだから当然だ。美意識の高い空間をのちのちまで残すために、天気の良い日には太陽側の窓に、さりげなく白いロールスクリーンを下ろして廻り、強い日射しをやわらげるということもされている。

そんな館内に花が飾ってあると「大事な建物だから、気をつけないと」という緊張感よりも、「外交官の家に招かれた客人」という気分になる。貴重な建物を鑑賞する、というような距離感ではなく、「ようこそいらっしゃいました！」という温かな気持ちを感じる空間に変わる。

館内の花の場所を事前に出品者に割り振って、それぞれの空間を意識しながら器や敷物を考え、花をいけてもらった。独りよがりでなく、来館者を意識しながらいけられた花は、どの花も部屋に調和していた。数種類の敷物を持ってこられて、雰囲気に合うものを現場で選んだり、360度どの方向からも見られるようにしたり。そのようにして、「ようこそ」の気持ちがこめられたいけばなはいけられていった。

最初に書いたが、花をいける思いはいろいろあっていいと思う。でも、今の世の中に「ウェルカムないけばな」が必要とされていると強く感じる。花と花の空間を意識して、花自体が気持ちよく感じてくれるようにいけられたいけばなは、見る人も心地よくしてくれる。そんな花のまわりでは、人と人も心地よい関係になれる気がする。

皆で心地よい空間をつくろう！

暮らしの中に、社会の中に、ウェルカムいけばなを！

温故知新

仙溪

「温故知新」は孔子が論語の中で、師となる条件として先人の思想や学問を研究するよう延べた言葉で、「ふるきをたずねてあたらしきをしる」とも読まれている。

ここで「温」という字が使われているのは何故だろう。うわべだけでなく、時間をかけて温めるように研究しなさいということだろうか。私たちのまわりの古くからあるもの。古くから伝わること。それらに命を吹き込めということだろうか。

私たちの花道では練習ではなく「稽古」と言う。「稽」は「考える」という意味で、「いにしえをかんがえる」ということになる。昔のことを調べ、今なすべきことは何かを正しく知るというのが元の意味で、学問での言葉だったのが、芸能や武術を学んだり習うことにも使われるようになった。

先人の思想や学問を研究したり、昔のことを調べなさいと言われても、何から手をつければいいものか。でも、自分自身が道に迷ったり、物事に行き詰まった時に、昔の人はどうしてたんだろうかと、その時初めて自分で「探す」というのでいいと思う。大事なのはもがいて掴もうとする求道の精神だ。

今まで導いてくれた両親を亡くして、大切なものを「探す」毎日。「稽古」と「温故知新」を肝に銘じて、いけばなの道を進んで行こうと思う。

能の中の立花　仙溪

能の「半部（はじとみ）」の前場は僧侶が立花供養をしているところから始まる。

「立花供養」とはどんなものか。

「花の供養。花を立てて、花に回向する。」（中央公論社『解註・謡曲全集』より）

「切り取られた花々のために花を生けて、供養を行う仏事。」（小学館『日本古典文学全集』謡曲集より）

この「花を供養する心」が「半部」の要になっていると思う。

「半部（はじとみ）」

作者　内藤左衛門
素材　『源氏物語』夕顔の巻
場所　前：都・紫野雲林院（京都市北区紫野雲林院町）
後：都・五条の辺（京都市下京区五条通辺り）
季節　秋
時代　平安時代の想定
演能時間　約1時間20分

■あらすじ

都の雲林院の僧が夏の修行の終わりに立花供養を行っていると、1人の女が現れ夕顔の花を手向ける。僧が名を尋ねても答えずに五条辺りに住むことだけを言い残して花の陰に消え失せた。所の者に光源氏と夕顔の恋物語を聞いた僧は夕顔の霊を弔うため五条辺りを訪ねると、軒先に夕顔の花が咲いた荒れ果てた家がある。秋の月を眺め『源氏物語』を忍んでいると、半部が押し上げられ夕顔の霊が現れ、夕顔の花が縁で契った光源氏との恋の思い出を語り舞を舞う。やがて夜明けの鐘の音と共にまた半部の中に消え去った。

■語句解説

半部（はじとみ）：昔の建築様式で寝殿などの板壁の一部。上半分を窓のように押し上げられる蔀戸（しとみど）。

蔀戸（しとみど）：格子の裏に板を張った雨戸。

■小書

立花供養（観世・宝生・金剛・喜多）※舞台に実際に立花が供えられる。替之型（金剛）

（ここまで、大槻能楽堂ホームページより転載）

能「半部」の舞台に立てられた松真の立花。父・仙齋作。一九八一年四月。

「源氏・拾花春秋」『夕顔』より「夕顔の生花」。仙齋画。

光源氏が下町でめぐりあった美女の家の垣根に仄々（ほのぼの）と咲いていた夕顔の花。源氏がこの女性を夕顔と呼んで愛したのもつかの間、はかなく世を去ってしまう。「半部」ではこの夕顔の霊が現れて供養を願い出る。

夕顔の霊は、花を大事にする僧侶に心を開いて蔀戸（しとみど）を開ける。源氏の君に摘まれて命を縮めたのは幸せな一夜の想い出。後悔はなかったようだ。

「半部（はじとみ）」で思い出すのは、父（仙齋）が舞台の立花を担当した時のこと。私は大学の3回生だった。「テキスト215号（1981年5月）」で紹介されているので次に引用する。

4月12日に大阪のフェスティバルホールで上演される能楽「半部」のための立花を頼まれていたので10日から幹作りにかかった。

11日には大阪に運び、フェスティバルホールの大舞台で組み上げたが、2mの高さと横幅、奥行きがあるので相当な重量になる。しかも上演の際、橋がかりを舞台まで演者によって運ばれるのである。だから絶対ゆれても崩れないようにきっちりした立て方をしなければならない。

又観客の方から見ての遠目を考えて、それぞれの枝の減り張（めりはり）もはっきりつけなくてはならない。

おまけに四方正面の立花でなくてはならないと「なくてはならない」が、うんと付く花である。

だが吉田忠史君と中川和則君の協力で、楽しく仕事が出来て、美しい品の良い立花が立てられた。12日の当日は前記の二人に櫻子がついて行ってくれ、いざという時にそなえて、中川君が能装束をつけて舞台の袖で待機していてくれたそうである。（引用おわり）

文中の中川君というのが私である。

「幹作り」は主に松の立花を立てる場合に、その骨組みを作る作業のことで、幹をとめる切り口の切り方や立て幹への留め方に熟練の技が必要となる。今は電動ドリルというものがあるので、木ねじで簡単にできる作業も、昔は錐（きり）で穴を開けて釘を打って留めていた。そうすると、必ず一度は指を金槌でたたいてしまう。みんな痛い思いをしながら腕をあげてゆくのである。

さて、家元宅で手にあざをつくりながら立花の下準備を手伝い、翌日大阪へ運んで舞台脇で仕上げたわけだが、写真のように大層立派な立花だった。四方どこからみてもバランス良く、立花とは美しいものだなと思ったことを覚えている。

本番の日、父は母とはなと3人で岡山県の直門会いけばな展へ行かねばならず、吉田さん、櫻子、私の3人が立花の守り役になった。演者の衣装が当たって倒れた時には私が飛び出ていき、対処することになっていた。羽織袴を着せられて、じっと舞台を見つめ続けたので、心身共にくたくたになった。幸い立花は倒れることなく、重厚な松に正真の杜若が映えて大変好評で、ただ舞台袖で見守っていただけだったが、大役をやり終えた安堵感で、帰り道の気分爽快であったことも思い出される。

私が父の立花を手伝った、おそらく最初の想い出である。

狂言の中の立花　仙溪

「真奪」しんばい

作者　不詳
場所　京都東山（大蔵流）
　　京都深草（和泉流）

■あらすじ

シテ（主役）は太郎冠者、アド（脇役）は主人と通りがかりの男である。

主人と太郎冠者は、立花に使う真（中心となる枝）を取りに出かけ、良い真を持った男に路上で偶然出会う。

太郎冠者は男の真を奪うが、逆に主人の太刀を奪われてしまう。

主従は男を待ち伏せして捕まえるが、太郎冠者は男を縛る縄を悠々と綯い、その上あやまって主人を縄で縛ってしまう。「ぬすびとを見て縄をなふ」ということわざを舞台化した趣向。

「真奪」の時代背景

室町時代のたてばな

立花に使う真を取りに出かける、とあるが、狂言が成立した室町時代にはまだ立花とは言わずに「たてばな」と呼ばれるシンプルな様式であった。たてばなは真を中心に立てた足元に何種類かの下草を加えて構成される。

室町時代に、はたしてたてばなの真を取りに山へ出かけるということが一般的だったのだろうか。東京富士大学教授・網本尚子さんの「狂言に描かれた花『真奪』の考察を中心として」を参考にして、室町時代の花事情をのぞいてみる。

室町時代において、現在の生け花の源流にあたる立花（たてばな）が流行していたことはよく知られている。しかし、狂言でたてばなを題材とした作品は、実は「真奪」一曲しかない。

室町時代には、前代の寝殿造りが変化発展し、書院造りという建築様式が成立する。書院作りの中心は書院で、ここが対面所となるのだが、書院の主室の上段の間の背後には押板、違棚、付書院などが設けられた。

押板には三幅対の画幅が掛けられ、その前にはお供えするように三具足（香炉・花瓶・燭台）を置き、その左右に一対の花を立てた。また、違棚には上段・中段・下段ごとに、小花瓶を置いたり、口の広い花器を置いたりと、工夫をこらした花の立て方がされ、付書院には小花瓶を置いたり、釣花瓶や柱花瓶を置いたり、かなり自由に立てていたようである。この中で中心となり、最も重んじられたのは、三具足の花であった。

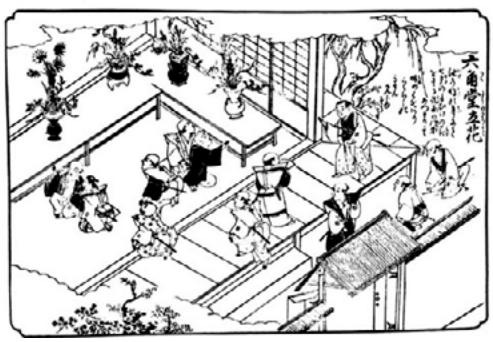
このようなたてばなを定着させたのは、将軍側近の同朋衆であったと考えられている。

同朋衆は将軍家の座敷を唐物の花瓶や書画、工芸品で飾る「座敷飾り」や諸芸能に従事した特別技能者たちをいう。

三代将軍足利義満の頃から花の御所や北山殿で、七夕法楽として仏教的行事の中で花を立てることが盛んに行われるようになり、同朋衆の立阿弥や能阿弥といった花の名手があらわれる。

また公家においても七夕法楽花会（花合）が行われ、山科家の雑掌である大沢久守、六角堂頂法寺の池坊専慶らが花会で花を立て、評判となる。

その後、一六世紀前半には、文阿弥（二世）が「文阿弥花伝書」を、池坊専応が「池坊専応口伝」という書を残し、たてばなの理論、様式の基礎を確立した。



「宝永花洛細見図」六角堂立花会
江戸時代前期頃の立花会の様子

さて、室町時代に立花の初期の姿である「たてばな」が武家や貴族の間で立てられていたのは間違いないだろう。七夕法楽花会（または花合）で飾られたたてばなはすぐには撤収されずに、近隣の人々も観賞することができたそうで、人々の関心もそこそこあったことが想像できる。

庶民の中でも富裕層の間では自分の家で座敷飾りを楽しむ者もあったのではないだろうか。花を立て、花瓶とともに観賞する立花の会も行われていたかもしれない。網本さんは次のように推測している。

虎明本には「此間は立花がはやって、各のまはり花をなさるるが」というセリフがある。茶道の七事式に花を客が順々に生ける「回り花」というのがあるが、七事式は一七〇〇年代半ばに定められたものなので、ここは七事式の回り花のことではないだろう。

狂言では連歌の会の出てくる曲が多いが、たとえば「千切木」でアドの「あたりの若い衆と寄り合うて、連歌の初心講を取り結んでござれば、すなわち頭に当たってござる」というセリフや、「連歌盗人」でシテが「初心講を結んで、近日連歌の当に当たっては御座れども、身上不如意に御座って、この当を勤める手段が御座らぬ」というセリフからもわかるように、当時の連歌会では、頭を持ち回りで担当していたようである。これと同じく、虎明本の「まはり花」も、酒宴の準備をしたりする当番や会場の提供を持ち回りでやる花の会、というくらいの意味だったのではないだろうか。したがって、「真奪」で述べられている立花の会とは、各自の家を持ち回りの会場として、花を立て観賞する会であると推測しておきたい。引用おわり

現代では「いけばな展」が様々な会場で催されている。一度に多くの花をいけて、多くの人に見てもらうわけだが、あまり多くのいけばなが並ぶと、じっくりゆっくり味わってもらえているだろうかと思ったりもする。

室町時代のように、自分の足で花材を探してくる時代ではない。いい花屋さんにはいい花材が売られている。でもそこにやってくるまでには、自分の知らないところで、大変な手間と苦労がなされているわけで、そんな花材でいけた花なら、時間をかけて見てもらいたいし、その花を肴にわいわいと友と語るような場面もあったらいいなと思う。

浄瑠璃、能、狂言と、古の花文化を垣間見てきたが、現代においていけばなを文学で表現する人はないものだろうか。劇になるならどんな物語だろう。あなたにはどんな花のドラマがありますか？

被災地へ

仙溪

5月の末に、2年ぶりに被災地を訪れた。NPOの仲間3人で訪れたのは前回と同じ宮城県気仙沼市の2カ所の仮設住宅。今回も現地のボランティア団体にお世話になり、当日は会場がいっぱいになる賑わいになった。前回の訪問を覚えていて下さった人も多かった。

「お花は人気がありますね」。孤独にならないようにと、イベント参加を呼びかけても、いつもそんなに多く集まってくださらないとのこと。

「あと2年は仮設暮らしなの」。集団移転の候補地は決まったものの、建設待ち状態だそうだ。「オリンピックが決まったおかげで、いつになることやら」「巨大な防潮堤ができちゃうと海との関わりが絶たれてしまう」お花の後の雑談に花が咲く。「帰ったら皆に伝えます！」

過去に何度も津波災害を経験した三陸沿岸。気仙沼にあるリアス・アーク美術館では、「東日本大震災の記録と津波の災害史」という常設展示で、悲惨な現実を記録、検証し、現場から未来に向けてのメッセージを発信している。同名の図録（８００円）は郵送で購入可能。

「人間だけを自然から切り離してはいけない。人類は自然を畏れ敬い、自然のリズムに身をゆだねて生きてきたはずだ。その永い時間の蓄積を再認する必要がある。」図録より。ここに編まれた一言一言が胸を打つ。多くの人と共感できればと思う。私たちの未来のために。

嫩？

仙溪

「立華時勢粧」の紹介も3回目となったが、読んでいただいているだろうか。現代語訳にすると原文の雰囲気が伝わらないので、あえて元の言い回しのままにしている。少々読みづらいかもしれないがご容赦を。

絵図の横に示した花材名については、『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）を参考にさせていただいている。

その中に「嫩」という花材名が何度も出てくる。はじめて見る字で調べてみると、

【嫩】［音］ドン　ノン
［訓］わか・い

《意味》若い。若くて柔らかい。

とあった。嫩葉は若葉のこと。柔らかな枝を加えることで、立花を生き生きとさせているのだろう。

大切なことは？

仙溪

宮城県の海岸には大きな黒い袋が整然と積まれていた。袋の中は震災がれき、いや津波でグチャグチャにされた大切なものたち。土地の人はどんな思いで見ているのだろう。愛しい過去の思い出。忌まわしい理不尽な体験。

黒い袋の中には悲しみが詰まっている。自然災害がもたらしたもの。その上に私たちが生んでしまった核汚染が追い打ちをかける。過ちと真剣に向き合わないといけない。つくってしまった過ち。使い続けた過ち。無関心の過ち。騙し騙されてきた過ち。

「放出された放射性物質は大変危険です。原子力政策はまちがっていました」と、いつか軌道修正してくれるだろうなどと思うのは間違いだった。他人任せではだめだ。日本の、地球の行く末は、一人一人がどんな生き方をするかにかかっている。

自分では何も生み出さず、消費することだけに熱心な人たちがいる一方で、純粋に、誠実に、自然の恵みに感謝して今を生きる人たちがいる。地に足をつけて、先人の教えのもとに、信じる道を進む人たち。そんな人の言葉に目を覚まさせられる。教わる、育てる、楽しむ。豊かな心を得るヒントは、自然と共に生きてきた先人の知恵の中にこそあると思う。

私たち一人一人が生き方を見つめなおす時なのかもしれない。日々の暮らしの中で自然の命をどれだけ感じているだろうか。「ほんとうに大切なことは？」

テキスト 615
2014 年 9 月

若杉ばあちゃん

「若杉ばあちゃん」の書いた本が静かなブームになっている。数日前から、そのうちの三冊を買って読み始めている。私自身、年初に「温故知新」を唱えていたので、日本人の昔からの知恵が詰まっていそうな気がして興味がわいたのだ。

「秋茄子は嫁に食わすな」ということわざの本当の意味をご存知だろうか。「家の子孫を産む嫁を思って、食べさせたくない」からで、秋の茄子を食べると流産しやすくなることを昔の人は知っていた。

若杉友子さんはそのことを食材の陰陽で説明している。

茄子は陰性で拡散する力が強いため、食べると子宮が冷えてゆるむ。とくに秋茄子は陰性が強まるとのこと。

陰性は体の中心から外へにげていくエネルギーで、陽性は逆に体の中心に集まる求心のエネルギー。陰性の食べ物は体を冷やし、陽性の食べ物は元気が出る。食べ物に含まれる、陰性のカリウムと、陽性のナトリウムの割合を知ること。

昔の日本人の食生活は、もともと陰性である野菜を火や調味料で陽性にして食べ、季節の変化や体調にあわせて陰性と陽性の食べ物をバランス良く摂ってきた。野草の効用も大きい。肉を食べなくても強靭な体をつくれたのだ。そしてお米は陰陽を併せ持つ元気の源。味噌はそこん家の宝物。

お伝えしたいことが多すぎるので、皆さんも是非ご自分で読んでみてほしい。

若杉さんは今の日本を嘆いている。日本人一人ひとりが口と心の「食い改め」をするべきだと云われている。

良い師匠に出会えたことに感謝。これからの私たちにとって、本当に大切なことを、若杉ばあちゃんはなんとかして伝えようとしている。

テキスト 618
2014 年 12 月

草木の風興　　仙溪

古い花書に「風興」という言葉が出てくる。室町時代後期、立て花の名手であった池坊専応の口伝を記述した「池坊専応口伝」は、次のような文章で始まる。

瓶に花をさす事、いにしえよりあるとはきき侍れど、それはうつくしき花をのみ賞して、草木の風興をもわきまへず、只さし生けたる計なり。

この一流は野山水辺をのづからなる姿を居上にあらはし、花葉をかざり、よろしき面かげをもととし、先祖さし初めしより一道世に広まりて、都鄙のもてあそびとなれる也。

この文章のあとも、「絶景もそこへ行かねば見られないし、絵を見ても夏涼しくはならず、秋に香りがするわけでもない。庭に山を築き泉を引くのにも大変な手間がかかる。（それなのに）僅かな時間で床にいけられた、ただ少しの水と小さな枝が、奥山の勝景をあらわし、風の匂いまで感じることができるのはまさに妙術。草木を見て心をのべ、春秋のあわれを思うなら、その悟りの種を得ることもできるだろう。」と述べている。

「立華時勢粧」が世に出るのは「専応口伝」からおよそ百五十年後。その序文でも「ちからをもいれずして高き峰、深き溪を小床に縮む。至らずして千里の外の勝景をみること、その術、諸聖云の及ぶところにあらず。」とある。また、「立花八戒」の中では「心花にあらざる事」を戒めている。

おそらく冨春軒仙溪も、「草木の風興をもわきまえず只さし生けたるばかり」ではいけないと考えていたにちがいないが、百五十年の間にシンプルな立て花は、より複雑な立花になり、形式化してゆく中で、今一度自然に目を向け、「出生の景気」を大切にすべきだと書いている。

風興という言葉は漢和辞典に「風趣興味」と説明されている。「味わい深いおもむき」とも言いかえられるだろうか。

自然に目を向け、出生をよく理解することと同時に、心に留めた草木の風興をいけるようにしたい。

テキスト 619
2015 年 1 月

感受性

仙溪

いけばなと料理の共通点はいろいろあるが、自身の感受性を豊かにさせるという点も大きい。櫻子によれば、料理を続けていると、しだいに食材や調味料の特性がわかるようになり、それらを生かす工夫ができるようになってくるし、いけばなも一緒よ、とのこと。

なんでもそうだが、気持ちを込めて何度も何度も続けていると、はじめはできなかったこと、わからなかったことが、できるようになり、わかるようになってくる。自分という器が、だんだんと豊かになってゆく感覚といってもいい。

いけばなや料理は感受性を豊かにさせてくれる上に、まわりの人もしあわせにすることができる。美味しい料理や心のこもったいけばなは、「和み」を生んでくれる。

そんな花や料理がつくれるようになると、自然に「大切なものは何か」も見えてくるんじゃないかと思っている。季節のうつろいを肌で感じながら、ささやかでも、その時季の花や食材を味わうことがとても豊かなことなんだということもわかってくる。

ただお腹がふくれればいいとか、なんでもいいから生けておけというのではなくて、一手間を惜しまない暮らしを心がけたい。

テキスト 620
2015 年 2 月

蘊奥とは

仙溪

「蘊蓄を傾ける」という言い方がある。持っている知識や技能を精一杯発揮するという意味だが、「蘊」には、積む・蓄えるという意味がある。この蘊に奥をつけた「蘊奥」という言葉はご存知だろうか。「学問、技芸などの最も奥深いところ」を表す熟語だ。芸の蘊奥を極める、などというように使われる。「うんおう」又は「うんのう」と読む。

先月のテキストに、何でも長く続けると、見えなかったものが見えるようになる、というようなことを書いたが、花の奥義を極め、多くのお弟子さん達に慕われるようになられた大師範の先生方は、まさに様々なことを体得され、その一つ一つがご自身の内に積み重なって、素晴らしい知識や技能の蓄えをお持ちだ。

そんな大師範には、しかるべき役職にお就き頂いて、私が道に迷った時に教えを請いたいとの思いで、この度、家元になってはじめて、数名の先生方に「華老」位に就いていただくことにした。そしてその委嘱状に、「蘊奥」の発揮を願う一文がある。技術や知識はもちろんのこと、豊かなお人柄も見習わせていただきたい。

先日は岡山での総会・新年会で華老の授与式をさせていただいたが、それぞれの先生のお人柄を感じる、素敵なご挨拶をしていただき、胸が熱くなった。

華老の先生方（敬称略）

この度、次の先生方に、華老にご就任いただきました。

山本　竹泉（岡山）
竹内　慶陶（京都）
岩沢　雅芳（岡山）
横田　慶重（京都）
鈴木　秀映（岡山）
和田　慶千（大阪）
室山　粋声（岡山）
尾﨑　慶和（徳島）
上野　淳泉（岡山）
竹中　慶敏（京都）
小野　静泉（岡山）
武田　慶園（徳島）
長谷川慶賀（大阪）

今月号で紹介した「立華時勢粧」の中には、いけばなを習う心得について「事と理」があると書かれている。辞書を見ると「事」はものごとの事物・事象のこと、「理」はその背後にある真理と説明されている。まず、いけ方を身につけることに専念し、上手になったら「どんな花をいけるか」を考えよ、ということなのだと思う。

華老の先生方の花はいけ方はもちろん上手いうえに、皆さん独特の雰囲気がにじみ出ている。「事理不二の境に至りて花に自由を得べし」なのだ。父もまさに自由を得た花をいけていた。私もそこを目指したい。

花の見方

仙溪

「立華時勢粧」には「立花見様の事」として、人が立てた立花を拝見するときの心得について書かれている。

例えば招かれた家の床の間に立花が立てられてあるとして、どのように拝見すればよいかが詳しく書かれている。現代ではそのような機会は希になったが、心得として覚えておこう。立花は手間をかけて立てるのだから、拝見にも礼儀をつくしたい。

また「世人花を見て、あしき所を語れども、よき所を語らず。その心花にあらざるがゆえなり」とも書かれている。初心者の花でも何かいい所を探すようにしなさい、見つけたいい所を覚えておきなさいと教えている。

花の道を極め、花から何かを得ようとするならば、他人の花の批判ばかりしているようではだめですよ、ということだ。たとえお弟子さんがいけた花であっても、そこに新たな発見ができるような、大きな器を持ちましょう。

テキスト 621
2015 年 3 月

被曝対策

仙溪

2月24日、東京電力の発表によると、福島第一原発から高濃度の放射性物質を含む水が海に漏れ続けていることが明らかになった。それも昨年4月に把握しながら公表せず、対策もしていない。流れ出続けているものには、体内に取り込むことで体を蝕む大変危険な核種が含まれている。

そろそろ私達は本来知らされるべき危険について、隠されているのではと疑ってかかったほうがいいようだ。自分達の身は自分達で守る、そのために情報交換が大切になってくる。

心配しすぎてもいけないのだが、命あっての物種である。放射能の（正しい）知識を身につけて、その対策を講じつつ、元気はつらつで！

テキスト 622
2015 年 4 月

大日如来さまに花を

仙溪

京都東山花灯路に紫木蓮の生花をいけた。場所は清水寺の参道にある眞福寺で、通りに面した大日堂では、大日如来座像を拝むことが出来る。この如来様は岩手県陸前高田の松でできている。7万本以上あった松原が津波で消失し、1本だけ残ったあの場所だ。沖へ流された内の７００本が岸にもどったそうだが、鎮魂と復興の願いが込められて、大日如来像となった。

いけ込みは偶然にも東日本大震災から4年目の3月11日。被災地への思いを込めて、お祈りをさせて頂いた。

華道人口

仙溪

ここ数年、いけばな人口が減ってきた、という話しをよくするようになった。その原因の一番目には、いけばなに魅力を感じられなくなってきたことが考えられる。

多くの人は日々の暮らしの中で、花がいけられているのをどれだけ目にしているだろう。家に花を飾る場所が無いともよく耳にする。花をいけない家庭で暮らしている人は、いったいどこでいけばなに触れられるだろう。

今でも質の高い料理屋には気の利いた花がいけられているし、オフィスビルのエントランスに花がいけられているところも無くは無い。かなり減ってはきたけれど、店舗のウインドーでいつも気になる花がいけられているところもあるにはある。

それでもそんな花に足を止める人は希なようだ。みんな心に余裕がなくなってきたのだろうか。いけばなに魅力を感じられなくなってきたのは、魅力あるいけばなが少なくなっているのかもしれないが、それよりも魅力を感じる余裕がなくなってきたのではないか。

科学技術の進歩と共に、人の暮らしもせわしなくなってきた。便利なものがつくられると、時間をかけてじっくりつくることがなくなり、手塩にかけてとか、丹精こめてとかいう価値観が忘れられようとしている。しかし一方ではこれではいけないと思う人も増えつつあるようにも思う。

さて、華道人口を増やすにはどうすればいいだろう。自分自身がいけばなに興味をもちはじめた時の事を思い出してみる。ウィンドーの一輪挿しに目がいくようになったのは、いけばなを見る目が変わったのは、父がいけた花を見て「こんなんいけられたらいいな」と思った時からだった。

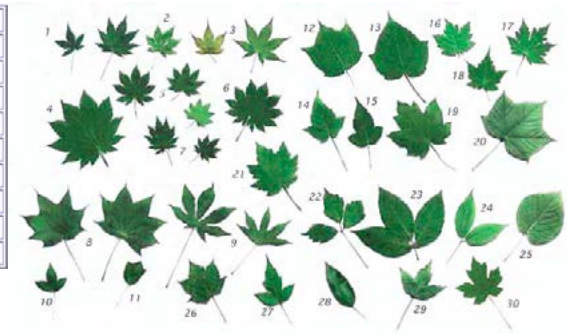
そう考えると、いけばな復興のきっかけは、人といけばなの「出逢い」が鍵になると云えないだろうか。花道人ひとりひとりが、周囲の人にその出逢いを提供すればいい。肝心なのはその出逢いが心のこもったものであること。一番はやはり誰かにいけばなを教えてあげるのがいい。職場に花をいけるとか、最新のツールを駆使して花の写真を多くの人に見てもらう、なんてこともありだ。

ここでもやはり「感動が人間を動かし、出逢いが人間を変えてゆくんだなぁ」である。

カエデの見分け方

９頁の楓(かえで)は、日頃イタヤカエデと呼んでいるが、正確にはハウチワカエデだと思う。
そこでカエデの識別方法として、葉の形とその名前を参考に紹介する。

1	イロハモミジ	11	タイワントウカエデ	21	オガラバナ
2	ヤマモミジ	12	ウリハダカエデ	22	ミツデカエデ
3	オオモミジ	13	ホソエカエデ	23	メグスリノキ
4	ハウチワカエデ	14	ヤクシマオナガカエデ	24	チドリノキ
5	コハウチワカエデ	15	ウリカエデ	25	ヒトツバカエデ
6	オオイタヤメイゲツ	16	ミネカエデ	26	アサノハカエデ
7	ヒナウチワカエデ	17	ナンゴクミネカエデ	27	カラコギカエデ
8	イタヤカエデ	18	コミネカエデ	28	クスノハカエデ
9	エンコウカエデ	19	カジカエデ	29	ハナノキ
10	トウカエデ	20	テツカエデ	30	クロビイタヤ



林田甫(はじめ)様のホームページ「カエデともみじ」より転載
http://mohsho.image.coocan.jp/report7.html

事故から４年４ヶ月

仙溪

インターネットができる人は是非「チェルノブイリ・ハート」という短編ドキュメンタリー映画を見てほしい。私はＹｏｕ・Ｔｕｂｅで見つけて見る事ができた。

１９８６年に起こったチェルノブイリ原発事故が子どもたちに与えた放射能被害の実態を、事故発生から16年後に描き、２００３年米アカデミー賞短編ドキュメンタリー部門でオスカーを受賞している。約40分、日本語の字幕がつけられている。

こういう話をいきなり日常の中でするのは難しいので、ここに書かせて頂いた。ネットの世界には妖しげな情報が散乱しているが、監督のマリアン・デレオさんに深い人間愛を感じたので、私はこのドキュメンタリーで見たことが現実なのだと信じている。情報の見きわめに、発信者の人柄は重要な判断材料だと思っている。人を思いやる心を感じるかどうか。見て感じて、共に考えたい。

屋久島

かねてより一度訪れてみたかった屋久島へ行き、現地のガイドさんと共に森の中を彷徨(さまよ)ってきた。

最初の山歩きでは終始土砂降りの雨の中を歩いたが、おかげで存分に苔の美しさを堪能した。

有名な縄文杉に会いに行くのはまた次の機会にして、静かな森をひたすら歩いた。そして思ったことは、自分の知っているどの山ともまったく違う感じ、一言で言えば生命力の次元が違う感じがした。

屋久島の山は花崗岩が隆起してできたために、もともと地表に堆積層がなく、植物にとっては土壌的に劣悪な環境だったが、多雨と深い霧のおかげで植物は少しずつ少しずつ成長してきた。根を張る土がないので強風で木が倒れる。するとその倒木を土台にして新たな生命が芽吹く。ゆっくり成長した木は緻密でなかなか朽ちない上に、朽ちても雨で流されてしまう。結局太古からの生命の循環が今もなお烈しく繰り返されているのが屋久島なのだ。

18年前の台風で倒れた蛇紋杉も見て来たが、仰向けになった根の裏側は真っ平ら(たい)。何百年もの間、花崗岩の上に立っていたということだ。そしてまた今後は次の世代の足がかりになるのだろう。

神々しい島、それが屋久島の印象。

写真①標高千m付近の樅(もみ)。②屋久島石楠花(しゃくなげ)の森。③紀元杉。

竹と月と人といけばな

岡山の夏の研修会では、かぐや姫の物語をイメージして舞台に花をいけた。（8～9頁に関連記事）

「竹取物語」は日本最古の物語と云われているが、かぐや姫が竹から生まれたことと、最後に月へ帰るという奇想天外なストーリーからは、「自然回帰」というテーマを感じる。

富や権力からの誘いをかたくなに断りつづけるかぐや姫……。そういえば、中国にそんな話があった。紀元頃の厳光（厳子陵）の逸話だ。後漢の皇帝となった旧友光武帝からの手厚い誘いを一蹴し、富春山で自然に囲まれた無欲恬淡の暮らしを貫いた。

厳光のように、山里で畑を耕し、富春江に釣り糸を垂れる、そういう自然な営みこそ尊いこととわかっていても、人は私利私欲を捨て去れないがゆえに、現実は混沌としていくものだ。そんなメッセージがこめられているのかも。

ともあれ、竹と月を印象的に扱っている点で、竹取物語は鮮やかに際立っている。竹と月に象徴された「自然」と、人の営みとを対峙させる。そんな着想があったのではないだろうか。

私達は竹や月と人との関わりをどれだけ知っているだろう。竹細工は化学製品に替わり、月の暦を使わなくなって久しい。人と自然の繋がりを感じとるアンテナを無くしてしまいそうだ。そんなアンテナを育てることも、いけばなの役割だと思う。

月の暦と太陽の暦

今年の中秋の名月は9月27日だそうだ。ちなみに来年は9月15日、再来年は10月4日と年によって違う。旧暦の8月15日が新暦のいつに当たるかということ。

現在の太陽暦に代わる前の太陰太陽暦（太陰＝月）では、月が見えなくなる新月から各月がはじまっていた。なるほど毎月の3日頃には、まさに三日月がでていたことになる。とても分かりやすい。満月は15日頃。

旧暦では7、8、9月が秋なので、中秋すなわち8月の満月を中秋の名月と呼ぶ。8月15日の月を十五夜、9月13日の月を十三夜と呼んで、どちらも月見をして月に供え物をしていた。十五夜は芋名月、十三夜は栗名月、豆名月とも呼ばれる。

一方で、太陽黄経の角度を元にした二十四節気もあって、秋分の日はその一つ。旧暦では毎年日が変わり、新暦では毎年ほぼ同じ日になっている。

さて旧暦と新暦を比べると、旧暦のほうが自然に添った暮らしができそうな気がするがどうだろう。作物の収穫も月の満ち欠けにあわせていたと聞く。そのあたりのことを一度調べて書いてみたい。

陰陽五行

仙溪

私が陰陽五行に興味をもっているのは、なにも陰陽師になろうなんてことではない。ただ、一人の華道家として植物のことをより深く知りたいという思いとともに、人と自然の関わりを見直すヒントがあるんじゃないかと思うのだ。

陰陽思想と聞くとなんとなくかけ離れた古くさい迷信のような考えに思う人が多いだろう。まず陰と陽について、それぞれどのような定義があるのだろう。中国古代哲学としての考え方を見てみよう。

原初、宇宙は天地未分化の混沌たる状態であったが、この「混沌」の中から光明に満ちた軽い澄んだ気、つまり「陽」の気がまず上昇して「天」となり、次に重く濁った暗黒の気、すなわち「陰」の気が下降して「地」となった。

このことは中国の古典、『淮南子』（紀元前一四〇年）の「天文訓」に書かれているが、同じ内容が「日本書紀」の冒頭にも引用されている。

この陰陽の二気は、元来が混沌という一気から生まれたというところが陰陽思想の要だと思う。（つづく）

「新たな気づき」

花道において、大師範の先生方がいける花には、なんともいえない雰囲気があるもので、それは、その人それぞれにご自身の経験から得てこられた、その人ならではの「気づき」の積み重ねが自然に出てくるのだと思う。

それに倣って一つでも多くの、素敵な「気づき」を得られますように、というのを、この一年のテーマとしたい。

陰陽五行

陰の気、陽の気と云うが、そもそも「気」とはなんだろう。「生命・意識・心などの状態や働き」「天地に生じる自然現象」「あたりに漂う雰囲気」などと説明されるが、要するに様々な「状態」「働き」を「気」ととらえることができる。

ものの状態や働きはその性質が強いときもあれば、弱い時もある。さらに極まって逆の状態や働きに転じたりもする。単純にこれは陰、これは陽というふうにすべてを二つに分けておしまいではなくて、陰的なものの作用と、陽的なものの作用を知って、それらの調和と、その間にどんな流れが生じるのか、それらが交わって何が生まれるのか、という事象の理解が重要となる。

陰と陽、この二気の働きによって万物の事象を理解するのが陰陽思想なのだ。森羅万象、宇宙のありとあらゆる物は、相反する陰と陽の二気によって消長盛衰し、陰と陽の二気が調和して初めて自然の秩序が保たれると考える。

陰と陽のそれぞれの性質を表にしてみよう。

陰	陽
遠心力	求心力
膨張、拡散	収縮、融合
上昇	下降
軽い	重い
暗い	明るい
湿潤	乾燥
柔らかい	硬い
冷たい	熱い
穏やか	活発
地	天
月	太陽
冬	夏
夜	昼
女性	男性
偶数	奇数

橐駝（たくだ）について

前号「立花色の事」にある「橐駝」について書かれた中国古書「種樹郭橐駝傳」は誠に興味深い内容なのでここに紹介します。

小林益夫氏の「風幡亭雑記帳」より転載。原文は「新釈漢文大系71　唐宋八大家文読本（二）　星川清孝著　明治書院」

「種樹郭橐駝傳（しゅじゅかくたくだでん）」

柳宗元（773～819）

通釈

郭橐駝（かくたくだ）は、そのはじめは何という名であったか分からない。背の曲がる病気で、背がもり上がってうつぶしになって歩くのが、駱駝（らくだ）に似ているところがあるので、それゆえ郷の人は駝（だ）と呼んだのである。駝はこれを聞いていった、甚（はなは）だ善い。私を名づけてまことに当たっている、と。それによって彼は自分の名を捨てて、彼もまた自分で橐駝（たくだ）といったということである。その郷を豊楽郷という。長安の西にある。駝は樹を植えることを仕事としていた。およそ長安の豪族や金持ちで物見遊山の庭を作る者や、果実を売る者などは、皆争って駝を迎えて彼の培養と視察とを請うのであった。駝が植えた所の樹は、遷（うつ）し易（か）えることがあってもよく根がつき活きて、大きくなり茂って、早く実がなり殖（ふ）えないものはなかった。ほかの植木をする者が、うかがい見て見習い慕っても、それに及ぶことのできるものがなかった。これを尋ねるものがあると、彼は答えていう、橐駝は木を生命長く、その上茂らせることができるのではない。木の天然自然に従って、その生まれもった生きる働きを導くことができるだけである。およそ樹木の性は、その根本はまっすぐに伸びるようにと欲し、その土をかけ養うことは平均していることを欲し、その土壌はもと植えてあったものであることを欲し、その根本の土を固めるには密ですき間のないことを欲するのである。すでにそうしてしまうと、あとは動かしてはならない。心配もしてはならない。そこから立ち去ってあとは二度と振り返り見ないがよい。その植える時は子を育てるときのように大事にし、植えて手放すときは棄てるようにすれば、その木の天性はそこなわれず完全で、その生きる働きが、適切に行われるのである。それゆえに私はその成長を害しないだけであって、それを大きくし茂らせふやすことができる力があるのではない。そのなる実を抑えへらすことをしないだけであって、それを早く実らせ多く殖やすことができる力があるのではないのである。

ほかの樹を植える人はそうではない。根は拳のようにかがまって土は前と変わり、その土を寄せ養分をやるのに、もし度を過ぎるのでなければ足りない。かりそめにも是に反して良くやっていても、また木を可愛がっていつくしみが過ぎ、心配して熱心が過ぎて、朝に良く見ては暮れに撫で、もはや立ち去ってからまた振り返り見る。甚だしいのはその木肌に爪を立てて生きているか枯れたかを験（ため）してみ、その根元をゆり動かして土にすきがあるか密につまっているかを調べてみる。そうして木の生きる働きは毎日離れて行ってしまう。これを愛しているというけれども、その実はこれを害している。これを心配するというけれども、その実はこれをいじめているのである。それゆえに私には及ばないのである。私はその上何ができようか。何もできないのである、と。

問うものはいった、お前のやり方を、役所の政治に移して行うことができるだろうか、と。駝はいった、私は植木のことを知っているだけである。政治は私の仕事ではない。しかし私は村里に住んで人の長であるものを見ると、好んでその法令を面倒にして、大変人民を憐（あわ）れんでいるようでありながら、結局人民に禍（わざわい）をしている。朝に晩に役人が来てさけんでいう、役所の命令で、お前たちの耕すことをうながし、お前たちの作物を植えることをはげまし、お前たちの収穫を監督する。早くお前たちの糸を繰（く）れ、早くお前たちの糸を織れ、お前たちの幼児を育て、お前たちの鶏や豚を十分に成長させよ、と。鼓を鳴らして人民を聚（あつ）め、拍子木を撃って呼びつけるのである。私たち農民は食事をやめて、それで以って役人をねぎらいもてなすのですらも、また暇がないのである。その上どうして自分たちの生活を繁昌させて、自分たちの生きるための心の働きを安全に保とうか。とてもできるものではない。それゆえ、病んでその上仕事を怠ってしまう。このようであれば、政治も私の仕事と、それこそ似ているところがあるのであろうか、と。問うものは喜んでいった、それも善いではないか。私は樹を養うことを尋ねて、人を養う術がわかった、と。このことを書き伝えて、それを役人のいましめとするのである。

（橐＝袋のこと。橐駝（たくだ）＝ラクダの正名。）

古書に習う

7頁で紹介した「種樹郭橐駝傳」は、流祖が書き記してくれたことを辿って知ることが出来たわけだが、誠に含蓄のあることが書かれている。三二八年前の流祖のメッセージを受け取ったみたいな、不思議な思いがしている。さらに、たまたま新潟の庭師さんがこの古書の紹介をされていたお陰もある。世の中には知らないことがなんと多いことか。でも、求めていれば、きっと新たな出逢いや気づきが得られるのだ。

テキスト 635
2016 年 5 月

陰陽五行

私達人間も自然の一部。前回紹介した陰と陽の性質や働きを繰り返し、また調和を保つことで生きている。素朴な例をあげれば、無意識にしている呼吸も吸って吐いてを繰り返しているし、「むすんでひらいて♪」のようにグーとパーを繰り返すことで血行が良くなる。活発な昼のあと穏やかな夜があるからまた一日頑張れるというように。私達には陰と陽の両方が必要なのだ。（つづく）

テキスト 638
2016 年 8 月

花あるからこその心広めたい

京都いけばな協会新会長 桑原仙溪さんに聞く

京都を拠点に活動するいけばな33流派でつくる京都いけばな協会の新会長に、華道桑原専慶流家元の桑原仙溪さん（55）が就任した。副会長として会の運営に携わって6年。新たな責務を担う桑原さんに、いけばな文化への思いや花を生ける心について聞いた。（太田敦子）

「いけばなを通して日々の暮らしや社会生活に役立つメッセージを発信できれば」と話す京都いけばな協会の桑原仙溪会長（京都市中京区・冨春軒）＝撮影・坂本佳文

「文化として学校教育の中に」

―いけばなの魅力をどうやって伝えていくか。

いけばなには芸術的な側面ももちろんあるが、私は東日本大震災後に東北を訪れた際、花があったからこそ見知らぬ人たちと心を通わせることができた。いけばなを習うことで新しい交流が生まれ、心を込めた作品が家庭や会社で生かされる―そんな存在意義を問い直したい。若い人が「何かやりたい」とアンテナを張った時に「いけばなってやっぱりいいよね」と思ってもらえるような企画ができれば。

いけばなは決して特別な存在ではなく、日々の暮らしを豊かにする一つのツールとして捉える人が増えることに期待している。

―今、流祖が残した書物を読み返している。

江戸時代初期に流祖が書き残したものを読んでいるが、現代に通じる考え方がたくさんあることに驚く。例えば「木に接する時には自然に従い、生まれ持った働きを導くだけ」といった記述があるのですが、非常に奥が深い。力ずくでねじ伏せようとするのではなく、植物を敬いつつ植物のことを知ってよさを生かす。この考え方はいけばなにとどまらず社会生活のさまざまな場面に置き換えられる。会長として、いけばなを通したこういう考え方を広く伝えてゆきたい。

―文化庁移転などの追い風もあるが、この動きをどう活用するか。

文化を暮らしの中に息づくものとして定着させてゆく好機だと思っている。その一つの方法として、学校教育の中に授業としていけばなを入れたいと協会を挙げて願っている。勉強というよりも、子どもたちが「文化って楽しいな、興味深いな」と思ってくれる機会になれば。習ったいけばなを家で生けて家族に褒められ、「ありがとう」と言ってもらえる。そんな経験を積むことができれば、暮らしにいけばな文化が貢献できるのかなと思う。

（京都新聞7月17日(日)朝刊）

テキスト 639
2016 年 9 月

陰陽五行

「陰気な人」「陽気な人」などと聞くと、陰が悪くて陽が良い、と誤解するかもしれないが、決してそうではなく、すべてのものに役割を見いだす考え方が陰陽のものの考えだ。

違った役割を持つ対極のもの同士が互いに助け合い、新たなるものを生み出すという思想。

陰とは、冷たい、暗い、柔らかい、ゆっくり、大きい、精神、女、こういった性質。

相対する陽は、熱い、明るい、硬い、早い、小さい、肉体、男、このような性質を持ってる。

これらの性質は絶対的なものではなくて、相対的なものなのだ。

植物と動物では、動かない植物は「陰」で、活発に動き回る動物は「陽」と見ることができる。

植物においても、天（陽）へ向かって成長する部分は「陰」、地（陰）に向かって下降する部分は「陽」というふうに、陰陽の調和でなりたっている。

陰は陽を求め、陽は陰を求める。男と女、磁石のN極とS極が引き合うのもこの原理。

調和のとれたいけばなは、陰陽などと意識することなく、硬いものと柔らかなもの、伸びるものと集まるものというとり合わせをしている。そんなバランス感覚が、世の中のすべてのものに共通して大切なのだと、陰陽を知って改めて思う。

テキスト 640
2016 年 10 月

巨人のいけばな感

今月の表紙の器を作られた柳原睦夫さんに聞いたお話。

柳原さんは前衛花道家の中川幸夫氏と親交があり、「手を入れるのが怖い！と思うような器を作ってよ。そしたら僕が命がけで花をいけるから」と言われたそうだ。

その言葉から真剣勝負の緊張感を覚えた。中川幸夫氏は、いけばなにどんな思いを持っていたのか。

いけばなに対する思いは人それぞれだ。経験とともに思いも深まるが、それぞれの時点の真剣な思いは、どれも皆いけばなにとって大切な要素なんだと思う。

でも、自分には無い、より深いいけばな哲学に触れることは、自分のいけばなにとって貴重な暗示になる。先の言葉に出合って、私がこれから花をいける時、きっと何かが違ってくるだろう。

言葉から受ける影響もあれば、写真から受ける影響もある。

工藤和彦先生の「アンデスの花影」という作品集では、古代ペルーの土器に、不思議な形や色彩の植物がいけられている。そこには花と器の出逢いを心から楽しんでおられる工藤先生を感じて、やっぱりいけばなはそうなんだと納得する一方で、真剣勝負の凄みに打ち震えてもいる。

二人の巨人のいけばな感は、多くの人に影響を与えている。

朝の連続テレビ小説

仙溪

好き嫌いはあるだろうが、私はNHKの朝の連続テレビ小説をほぼ欠かさずに見ている。そして時には登場人物のセリフを書き留めることもある。

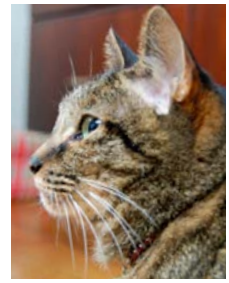
東北の大震災と原発事故以来、人と自然との関わり方を考えることが多くなったし、昔の人々の暮らしと現在とでは何がどう違っていて、これからどうすればいいのかと悩んだりする。そんな思いがあるので「あさが来た」のヒロインの姉夫婦の言葉に共感したり、「とと姉ちゃん」に描かれた戦中戦後の人々の暮らしとその思いに心を打たれる。

「大きうなろうやなんて思わんかてええ、地に足つけてしっかり歩くことさえできたら、それでええんだす」（はつ・あさが来た）

「誰に愛想笑いして頭下げることものうて、土の上に立って自分で耕して、ミカン作って家建てて子を育てて、こないな誇りあれへん。孫まで見せてもろて、有難すぎておつりくるわ」（惣兵衛・あさが来た）

「美しいものは、いつの世でも、お金やヒマとは関係がない。みがかれた感覚と、まいにちの暮しへの、しっかりした眼と、そして絶えず努力する手だけが、一番うつくしいものを、いつも作り上げる」（花森安治・「暮しの手帳」編集長）

テキスト 641
2016 年 11 月



ゴンチャン先生とレモン師匠

日々のいけばなを紹介したくて、家で飼っていた猫のごんちゃんの写真を混ぜ「ゴンチャン花日記」というブログを始めたのは、私が家元を襲名した年だった。その後ごんちゃんがお星様になり、3年後にレモンがやってきた。今は「ゴンチャン先生」と名のってインスタグラムという所に写真を投稿している。いつも花を見に来るレモンは皆に愛され「レモン師匠」と呼ばれている。

猫に助けられ、時には教わることも多いわけだが、花も猫も人間も命を育む仲間なんだなあと、しみじみ感じている。今後とも、ゴンチャン先生とレモン師匠のコンビをよろしくお願いします。

テキスト 643
2017 年 1 月

二〇一七年・平成二九年 丁酉（ひのととり）

今年は酉年。十干十二支、いわゆる干支で云うと「丁酉（ひのととり）」にあたる。

「丁」は草木の形態の充実した状態。発達の最終段階。

「酉」は果実が成熟の極限に達した状態。また酒樽の中で酒が発酵し、熟し、成る様を表している。

このような解釈から、今年は機運が熟して新たな勢力が発し、革命の岐路となると解説する人もある。

古代の中国で考えられた「干支」は、植物の成長の過程を十と十二の字で表し、その六十の組みあわせでできている。

植物は種子から芽を出し、太陽に向かって伸び、枝を広げ葉を茂らせ、花を咲かせて実をむすび、種に新たな未来を託す。人はもちろんのこと、時代の流れも植物の営みに似た変化を繰り返しているのだろうか。

そういえば竹の花は六十年に一度咲くという。干支の数と同じだ。

先人達は自然から多くの事を学んできたが、私達はその多くを忘れてしまっていないだろうか。それらを未来へ引き継げるだろうか。

自然の恵みに感謝し、自然を尊ぶ気持を伝え、健やかな心を育む仕事をしたいと、年頭にあたって気持を新たにしている。

テキスト 644
2017 年 2 月

立華時勢粧の時代

今月号の「立華時勢粧を詠む」の中で「本草に時珍曰く」とか「藻塩云う」などとあるのは、参考にした書物の名前やそれを書いた人の名前なので、紹介しておく。

李時珍

（1518年（正徳13年）～1593年（万暦21年））

字を東璧、号を「瀕湖仙人」といい、中国・明の医師で本草学者。中国本草学の集大成とも呼ぶべき『本草綱目』や、奇経や脉診の解説書である『瀕湖脉学』、『奇経八脉考』を著した。

現在の湖北省で、代々医師を務める家に生まれた李時珍は、幼い頃から、父の助手をしながら育った。子供の頃から病弱だった時珍は、医学への思いが強く、才能はたちまちに開花して、名医として名を知られ、明の皇族である楚王までが彼を頼るようになった。そして、時珍34歳の時に、明朝における医学の最高機関であった「太医院」に推薦を受けて、北京に赴く。だが、彼には中央の役人は性に合っていなかったらしく、1年後には帰郷をして、再び地元で医業を始める事となった。

中国の本草学は、神農が全ての薬草、毒草を食べて作ったとされる『神農本草経』を原典として、多くの増補が繰り返されてきた。だが、時代が下るにつれて、名称や薬効についての誤りや、重複、遺漏が多数含まれるようになっていった。李時珍はこれを憂慮して、新しい本草学書の編纂を志す。参考にした書物は800種、彼自身も多数の薬物の実物を収集して研究を重ね、26年の歳月を費やし、61歳の時に、『本草綱目』全52巻190万余字をもって完成させた。

最初その出版は神農を軽視するものとして事実上閉ざされる事となったが、李時珍に理解を示す人たちの奔走で、1593年に南京で出版、時の皇帝万暦帝への献上の機会を得、万暦帝から賞賛されて、出版に便宜が図られる事になった。

この本は日本などの周辺諸国のみならず、ラテン語などのヨーロッパ語にも訳され、世界の博物学・本草学に大きな影響を与えた。

藻塩草

月村斎宗碩編 10冊。1669年（寛文9年）刊。

連歌を詠むために用いるもので、古典等から語句を集め、注解を加えた書。20部門に分類されている。藻塩草は藻塩をとるために使うが、その際掻き集めて潮水を注ぐことから「書き集める」のかけ言葉になった。本書の題は「書き集めたもの」の意。

立華時勢粧の「紅葉一色と桜一色」

先月と今月で紅葉と桜の一色立花を6図掲載した。

「桜は諸花の頭、楓は紅葉の長」と書かれているように、極めて大切な立花図が連続で登場したことになる。百十八図のほぼ最後に登場し、それらすべてが見開きの図版であることからも、力の入れようが伺える。

「紅葉を尊敬する心」「桜を尊美する心」から、ほかの草木をとり合わせる場合、紅葉には「紅葉しない草木」や「色有るを嫌って菊も白花」、桜には「花の咲くことのない草木をあしらいだけに」用いるようにし、あくまでも紅葉を引き立て、あくまでも桜が主役となるような配慮をもとめている。自然の美に対する敬意が強く感じられる部分だ。

「高雄山の紅葉のように峰より染め」「吉野山の桜のように麓より咲く」ように立てよとは言うけれど、「伝授多くある」ので初心のうちはこれを立てないようにとも書いている。この部分を私なりに解釈するなら、高雄山や吉野山のようにしないといけないなどと囚われるよりも、まずは手にした枝をのびのび生かすことの方が大事なんだよと言っているように思う。

実際の立花図を見てみると、紅葉については2つの図で峰より染まっているように感じられ、紅葉だけで立てた真の一色にはそれは感じられない。先月号でも述べたが、一本の楓の大樹のようである。

一方、桜の立花図を見てみると、一見どの枝も少しの蕾がのぞくものの、ほぼ満開のように見える。桜はこだわりなく自由に立てているのだなと思ったが、よくよく見ると「砂の物」の控枝と流枝には蕾が極めて少なく、真や請の梢に蕾が多めであるように感じる。麓から咲き上る様をさりげなく写し取っている。

また、紅葉と桜の図を見比べると、楓には晒木、桜には苔木がそれぞれ効果的に使われている点にも注目したい。肝心なのは自然を手本にするということ。

そして又、桜を詠んだ聖武天皇の詩が面白い。一つの漢字を一度はそのまま読み、もう一度は二つの字に分けて読むというユニークさに驚かされる。他にも中国の杜牧や王安石の詩を引用しながら花の知識を深めさせてくれるなど、豊かな教養に加えて、読む側を花の世界へ引き込むような文章の力を感じる。

立花時勢粧の中でも特別な6つの図を掲載したことで、この連載の責任の重みのようなものを改めて感じている。流祖の技や思いや心といったもの、選ばれた詩や言葉たち、そして絵図から読み解く様々な教え、それらを一つでも多く手に入れるための手がかりとして、内容の紹介を続け、深めてゆきたい。

※「第68回華道京展 - 風・流　FU-RYU - 」を主催する京都市の門川大作市長、京都いけばな協会の桑原仙溪会長と大丸京都店の丹羽亨店長が同展やいけばな、京都の文化・芸術について語り合った。（3／29）

大丸創業300周年記念鼎談「京都の文化といけばな」

―京都は「いけばな発祥の地」と言われます。なぜ京都でいけばなが生まれ、その魅力が衰えずに続いているのでしょうか？

■門川大作・京都市長　京都の歴史は精神文化と物質文化が融合し、心と物が刺激を与え合って進化してきました。その背景に人々の絆や自然との共生や宗教的情操があります。いけばなも、お供えする供花が原点ではないかと思います。今、世界の人々が花を愛で、お茶を愛し、香りを楽しみますが、京都に生まれ日本で発展してきた、いけばなもお茶も香も哲学にまで進化させたのは京都です。「はんなり」という言葉は、そもそもは「花あり」です。花と人間の生き方、暮らしの美学と哲学を融合させ、花により人を育ててきた歴史や街づくりがあります。それを大丸さんが応援し続けてこられたのが、この華道京展でしょう。33もの流派が仲良く切磋琢磨し連携するのが、京都のすごさですね。

■桑原仙溪・京都いけばな協会会長　日本文化をリードしてきたのが、なぜ京都だったかと考えると、三方山に囲まれて手の届く所に自然があること。さらに公家文化への憧れがいろんな文化を育む背景になった。風流を愛でる雅の心が京都の文化の象徴だろうと思います。そしてオリジナルな美を創り出そうとする強い気持ちを持つ人が多くいたこと。室町の足利将軍、利休、光悦、宗達らのように。近く映画「花戦さ」が公開されますが、新たな美を生み出そうとしていた時代の空気を感じられるのではと期待しています。いけばなは生きている自然と一緒に作る芸術、文化、美です。それらがすべての文化、芸術につながり、影響を与えてきたと思います。そんな京都に文化庁が移転します。

■丹羽亨・大丸京都店長　この華道京展は昭和25年にスタートし、大丸は昭和36年から関わり半世紀やらせて頂いています。大丸は今年で創業300周年。1717年、伏見で当時は小さな呉服商だったのですが、徐々にいろんなものを取り扱い百貨店となる中で「物」だけでなく「事」にも重きを置き、文化や芸術をお客様に提供しなければならないという使命が出てきた。京都はいけばな発祥の地であり、この華道京展をどうしてもやりたかったのだと思います。徐々に参加する流派を広げて頂いた。全国の百貨店で華道展はいろいろやられていますが、33流派もそろうのはなかなかないです。

■門川　絶対ないですね。日本の華道の最高峰じゃないですか。

■丹羽　33流派の方たちが切磋琢磨しお客様を楽しませて頂いている。これからも文化、芸術の中心地である京都において、大丸京都店はこういう事業に力を入れていきたい。文化庁が京都に来ることを考えると、一層力を入れなければならないと思います。

―いけばなの未来や可能性についてどうお考えですか？

■丹羽　寺社仏閣が京都ほど多い都市は、世界でも稀です。その信仰の中でお花が脈々と受け継がれてきた。いけばなは人に安らぎを与えます。京都は世界でも尊敬される街です。来店される外国の方が増えていますが、物だけでなく芸術や文化にも興味を持たれている。今後も京都の文化の良さを世界の方々に紹介できるよう、微力ながら貢献できればと思っています。

■桑原　今年の正月から大丸京都店では、ダウン症の書家と画家による「共に生きる展」が開かれましたが、これからの時代は共に生きることが大事だと感じました。先日、染織家の志村ふくみさんが自然を尊ぶ気持ちと自然の恵みに感謝する心を育てる仕事していきたい、と言っておられました。まさに、いけばなもそうです。花を選び、器を選ぶ時に感じるのは、人と同じだということです。最初は苦手な人同士でも段々と気持ちが通じ合う。いけばなも回を重ねていると、花の方から心を開いてくれる。自然と心を通わせることを、人と心を通わせることにつないで頂きたいと思います。社会でいけばなを生かす場を、皆さんと一緒に作っていきたい。ドイツで花を生けていると、言葉の通じない人たちとも花を通じて心を通い合わせることができました。東北の被災地でも一緒に花を生けている中で打ち解けることができた。お花はそういう力があります。

■門川　世界を見ると、争いや環境破壊など心を痛める問題があります。日本人が大事にしてきた心を再認識せねばと思います。自然を尊び自然に感謝する。人も自然と共に絆を大切に生きる。よく京都のお勧めの観光の場所は、と聞かれると、京都の街ではどこでも御地蔵さんがまつられていて、きれいな水と生花がお供えしてある、と言って紹介します。世界に宗教都市はたくさんありますが、街の至るところに御地蔵さんがまつられているような街は他にありませんね。日本の文化のすごさは暮らしの中、衣食住と地域社会の中にあります。ヨーロッパ文化は上流階級のものだったと言われている。明治維新の頃に日本の識字率は9割を超えていた。ヨーロッパは5割。日本は、暮らしの中に文化があり、字を教えた。花も教え、長屋の小さな家でも花を生ける場所が暮らしの中にあった。でも床の間がなくなったりして、花を生ける所がなくなってきた。家の中に花を生ける場所を復活させられないだろうか、と思っています。

―今回の華道京展は、大丸創業300周年を記念して特別展示もあるのですね。

■丹羽　大丸は創業者の「先義後利」という言葉を社是としてスタートしました。その言葉の本質をもう一度見極めたいと思っています。顧客第一主義と社会的貢献の意味を噛みしめて、京都の方々に支持されて何とか300年やってきた。何か恩返し、貢献ができないかという思いがございます。大丸の300周年のテーマは「不易流行」です。芭蕉の俳諧の理念で、古い歴史の中にも新しさを取り入れていくという意味だと思うのですが、それはいけばなにも通じるものがあると思います。それをテーマに打ち出しながら、68回目の華道京展を華々しく開催するとともに、今後も京都のために頑張ってまいりたいと思います。

※京都新聞情報サイト「こととしるべ」より写真と文を転載させていただきました。

ペンフレンドに会いに

母・素子の妹、章子さんには、中学生の頃に文通を始めたドイツ人女性の友達がいる。6月に会いに行くというので、アメリカへ同行した。

章子さんのペンフレンド、カリンさんはオペア留学（海外ホームステイ先でベビーシッターをしながら学校に通う）でアメリカを訪れた時、同じくドイツ人留学生と出会って結婚。現在は、カリフォルニア州サンフランシスコ郊外の、プリザントンに暮らしている。IT企業が集まるシリコンバレーで働く人も多く、比較的所得の安定した人が多く住む町だ。

私達4人（もう一人、カリンさん繋がりの友人、花苗（さなえ）さんが加わって）はカリンさんの家に寝泊まりして、一緒に食事をつくったり、公園をゆっくりと散歩したりしながら、新たな親交を育んだ。

カリンさんの周囲の人は皆、健康志向が強く、毎朝散歩し、ジムに通い、少し値段が高くても有機野菜にこだわって、ファーマーズマーケットで旬の野菜や果物を買う。「健康に注意して、明るく楽しく暮らすことで、医療や薬に頼らず、年を取っても自分のやりたい事ができるようにしてるのよ」とカリンさん。私達をいろんな所へ連れて行くために、毎日何時間も運転して下さった。とても優しくて、タフな女性だ。

①

②

③

④

⑤

カリンさんに強く勧められて、章子さんと私達の3人で、ヨセミテ国立公園にも行くことが出来た。花崗岩の岩山に囲まれた、緑豊かな渓谷だ。特に春から初夏までは雪解けと雨によって雄大な滝が生まれる。なかでも北アメリカ最大落差のヨセミテ滝は、公園内のいろんな場所から見る事ができ、遠くからの眺めがなんとも美しい。

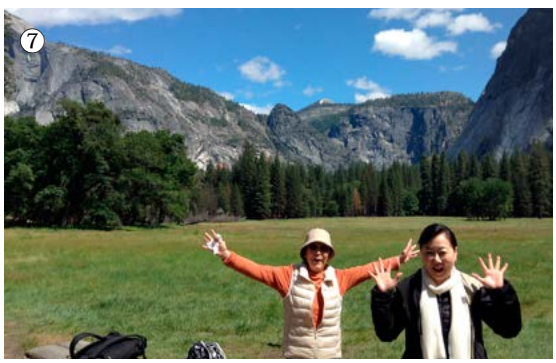
ヨセミテ渓谷には自然を満喫するために多くの人が来る。キャンプ場、コテージ、ホテルなどが、自然に配慮してつくられている。様々なハイキングコースがあり、それぞれの起点を結ぶ無料巡回バスが走っている。私達もヨセミテ滝の下滝を見に行ったが、森の中を流れる川をたどりながら、平坦な遊歩道を歩く楽しいコースだった。

歴史を感じるマジェスティックホテル（旧アワニーホテル）に泊まれたことも貴重な体験となった。岩山と森と川と。朝の散歩で野生のシカやリスに出会い、夜は星空を眺めた。

叔母が大切に温めてきた友情のおかげで、めったにできない体験をさせてもらえたことに感謝している。

①カリンさんの庭で摘んだ花でテーブル花をいけた。どの花も可愛い。
②隣に住むご夫妻と公園を散歩。ご主人は日本人。種子島出身で、若くして単身アメリカへ渡った強者（つわもの）。
③カリンさんファミリーとの朝食。娘さんの手作りマフィンにベーグル、ワッフル、フルーツ色々、スモークサーモン、ピクルス等々。
④⑤ファーマーズマーケットには色とりどりのオーガニック野菜、果物が。ジャガイモとブロッコリー。
⑥ヨセミテ滝の下滝でマイナスイオンを満喫する。
⑦雄大なヨセミテ国立公園はユネスコの世界自然遺産。
⑧ホテルで。寛（くつろ）ぎの空間が奥へ続く。
⑨日本で花をいけてねと、カリンさん夫妻にいただいたアンティークの水指に、赤いバラとサンキライで出逢い花をいけて写真に撮った。

⑥


⑦

⑧

⑨

桑原専慶流のいけばな

桑原専慶流は、京都で江戸時代前期に生まれ、三百年以上続く華道の流派です。流祖の桑原冨春軒仙溪は、公家や武家、寺院の床飾りとして発展していた立花の名手でした。卓越した知識人で、当時の植物学にも造詣が深く、その学識を存分に駆使して一六八八年（元禄元年）に「立花時勢粧（りっかいまようすがた）」（全８巻）を出版しました。その中で述べられている花道論は、今日までいけばなに大きな影響を与え続けています。

流祖は自然を敬う心を何よりも大切に、自らの心眼で美の極みを探り、そこから感受したものを自由闊達に表現しました。秀麗で理知的な気風も特徴です。ただし、本質を見極めなければ、何ものにもとらわれない本当の自由は得られません。技を磨くだけでは駄目なのです。この道理をしっかりと踏まえて、一人ひとりが自らの奥深くに秘めている個性や創造性を鮮やかに開花させる。それが代々継承し、目指してきた桑原専慶流のいけばなです。

Takaya Fujii

藤井隆也さんは京都芸大で日本画を学ばれ、ドイツ留学を契機にその伝統的な様式や素材にこだわらない、現代美術のフィールドに活動の領域をひろげてこられた。

桑原専慶流の師範でもあり、日本の「いけばな」への深い思いを持っておられる。日本、ドイツ、スコットランド、イギリスを行き来して制作と発表を続けておられるが、昨年と今年には、「いけばな」と深く関わりを持った芸術表現の試みをされた。

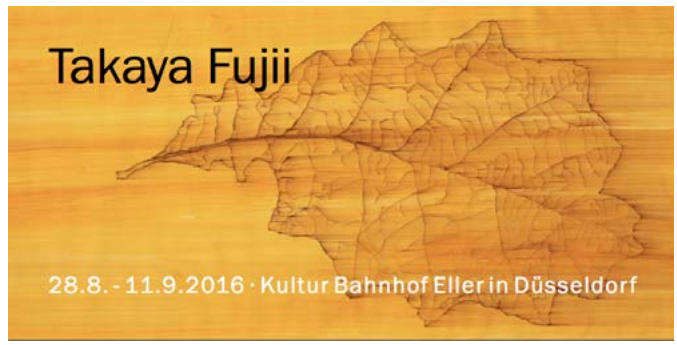
昨年デュッセルドルフでの2週間におよぶ展覧会では、262枚の楢（ならの）の枯葉を拡大して描いたものが、部屋の壁を埋め尽くし、床に置かれた白い水盤には水が張られて樫（かし）（オーク）の枝が立つ。さらに樫の実、枯葉、青葉、それぞれを使った印象的な作品が置かれている。

枯葉一枚一枚との対話が絵となり、葉や実の命の輝きに対する藤井さんの感動がオブジェから伝わってくる。そして毎日挿し変えられる生の枝によって、彼の自然との関わりを感じることが出来る。

藤井さんは京都の御室仁和寺の近くに住まいがあり、ここ20年間、日本にいる時はほぼ毎朝、仁和寺の裏山を散歩して、自然の移ろいに目を向けてこられた。

そんな中で、散り椿が人に踏まれる前に拾い集めて塩漬けにしたり、柿の紅葉の色彩を氷の塊にしまいこんだりして、朽ちゆく植物の命を作品にとどめてこられた。自然から受けた感動を純粋に自分を通して表現することにこだわっておられるように感じる。

262枚の葉は般若心経の文字数と同じで、藤井さんにとっての写経だそうだ。海外での修行の先にどんな芸術世界をこれから作られるのか、そして海外だけでなく日本でも、「いけばな」の心を表現する活動を展開していただきたい。



毎日ドイツの森を歩き、オークの枝を集め、ギャラリーに生ける。藤井さん独自の表現は、いけばなの深奥と繋がる。

高松・栗林公園

香川県は古くから讃岐国と呼ばれる。これは、国の形を見た時に、四国の他の国に比べて横幅が狭いことから「狭緯」（緯＝東西の距離）と呼ばれていたのが、「讃岐」に変わっていったそうだ。

讃岐といえば、「讃岐三白」とよく云われるけれど、三つの白いものが何かと聞かれて正確に答えられるだろうか。正解は綿、砂糖、塩である。

讃岐は晴れの日が多くて雨が少ないため、常に水不足と闘ってきた。米作りのために作られた溜め池は一万四千余り。そのようにして苦労して米をつくる一方で、自然条件を生かした特産物として生まれたのが綿と砂糖と塩であった。

綿花や砂糖黍は、温暖で雨の少ない気候に適した作物。そして塩づくりには広い遠浅の海岸と晴天の日が多いところがむいている。

近年「うどん県」と呼ばれるほどのブームとなっている「うどん」。こちらも日照時間が長いため、古くから二毛作によって小麦の生産が盛んで、うどんに慣れ親しんでいたことも背景になっているようだ。

さて、10月はじめに高松を訪れたのは、日本いけばな芸術四国展のためであったが、朝の手直しのあとは高松周辺を散策することができた。イサムノグチ庭園美術館、屋島寺、港の倉庫跡を利用したアートスポット、とても長いアーケード商店街、うどん屋、骨付き鶏なども堪能した。

どれも印象に残るものだったが、とりわけ感銘を受けたのが「栗林公園」である。

高松港から南へ約3キロ。紫雲山の東麓に位置し、面積75ヘクタールは文化財庭園としては国内最大の広さだそうだ。四百年近い歴史をもつ大名庭園である。

なんといっても低く拵えられた松の見事なこと。香川といえば鬼無や国分寺という松の産地が有名だが、松の生育に適した土壌と、松の手入れ技術が優れているのだろう。

栗林公園では丁度松の選定作業をされていたが、一千本の松の手入れはさぞ大変なことだろう。庭園内の小川では、丸石についた藻を5人の男性が箕で一つ一つ丁寧にこそぎとっておられた。気の遠くなる作業である。

昔、飢饉のとき、高松藩2代藩主の松平頼常は、被害に遭った人々を雇って庭園拡張をおこなった。雇用を生んで民を救ったわけだ。そんな藩主が愛した庭園ゆえに、高松の人々も愛着と誇りを持っているのだろう。貴いことだ。

その土地に根ざした文化の底力を感じた。いつか是非とも鬼無の松栽培も見てみたい。

栗林公園にて。①南庭全景。②松と。③薩摩藩寄贈の蘇鉄。

テキスト 655
2018 年 1 月

乱世の「茶」と「花」

昨年公開された映画「花戦さ」は、天下人である秀吉と、茶の利休と、花の専好の関係が軸になっている。とりわけ利休と専好の茶室でのやりとりの場面が強く印象に残った。

専好ははじめて利休の点てた茶を飲んだとき、何か大きな温かいものに包み込まれ、心が解けてゆくのを感じて涙する。庭、茶室、そこに生けられた花、会話、所作、それらすべてが温かな心で満ちていたのだろう。戦乱の世にあって、利休の茶によって心を癒やし、心を清めることができた武将たちのことを思った。

映画の後半、秀吉の怒りを買った利休に対して、心配でしかたのない専好は「上様に詫びを入れられればいいではないですか。これも『もてなし』だと思って、包み込むように詫びを入れればいいではないですか」と言う。その言葉を聞いた利休は「もてなしか。私はいつの間にか大事なことを忘れていたのかもしれないな」とつぶやく。強く印象に残る場面だった。温かく包み込む心。これこそ、究極の茶であり花である。そんなメッセージが込められている。

茶と花の二人の偉人。ともに命をかけて茶の道、花の道を守り貫いた。そしてその道を、私達も歩んでいる。

テキスト 656
2018 年 2 月

見方を変えてみる

今年は明治維新１５０年にあたり、大河ドラマも西郷隆盛が主人公。今なお人気を博す「西郷どん」のように、大きな眼で遙か遠くを見つめ、視野を広くもち、己の道を俯瞰する。そんな一年にしたい。と、カッコ良く言ってはみたが、健康で日々の仕事を精一杯できればなによりだ。

でも、今までとちょっと違う物の見方をしてみることが、新たな発見に結びつくきっかけになると思う。自分の中に眠っていたものが目覚めることもあるに違いない。視野を狭めず、柔軟に見方を変えてみようと思う。

いけばなでも、普段使わない器にいけると、いつもと違う花になったりする。また、いけた花を一度少し離れた所から見なおしたり、別の角度から見ることで、足りないところに気付くこともある。「見方を変える」のは大事なことだ。

テキスト 657
2018 年 3 月

純米吟醸「仙櫻」

偶然にも私達二人の名前が合わさったお酒をお弟子さんが見つけてくださった。但馬の国の長寿の桜（養父市大屋町）がこの名前で呼ばれているそうだ。

兵庫県宍粟市の山陽盃酒造の純米吟醸酒で、蛇紋岩米をブナ原生林の自噴水で仕上げ、明延鉱山坑道の地底に寝かせて熟成させるそうだ。

自然の恵みが、人の手により発酵という過程を経て新たに生まれ変わる。お酒づくりも、人と自然の共同作業という点で、いけばなと同じだなと思う。

いけばなもいける人のイメージの醸成によってより深いものになる。

天台圓淨宗大本山
廬山寺　節分鬼おどり

京都の廬山寺（廬山天台講寺）では、2月3日に追儺式鬼法楽（通称、鬼おどり）が執り行われる。今年はご縁があって、私と櫻子も豆まき役を務めさせていただいた。

人間の煩悩を表す赤、青、黒の鬼3匹が、邪気払いの弓矢と本堂での護摩焚きによって退散。その後境内に蓬莱豆や福餅がまかれ、それを参拝者が厄よけ開運を授かるために手を伸ばして取ろうとする。

豆は「魔滅」に通じ、邪気を追い払って一年の無病息災を願う。

廬山寺はもともと比叡山延暦寺の中興の祖である良源により天慶元年（938年）に京都の北山に創建された。良源は元三大師（1月3日が命日なので）、慈恵大師（朝廷から贈られた名）、また角大師、豆大師、降魔大師、魔除大師など多くの名前で親しまれている。

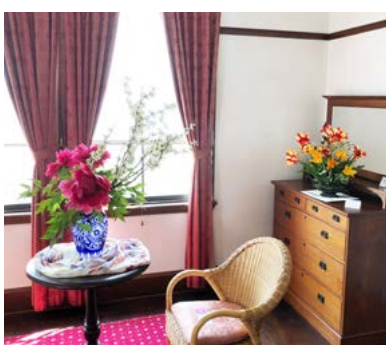
魔除のお札「角大師」は鬼守りとも呼ばれ、良源が鬼の姿になって疫病神を追い払った時の姿。廬山寺には良源が使ったとされる「降魔面」が伝わり、節分に特別開帳される。

歴史ある行事に参加させていただけたことに感謝するとともに、皆さんの無病息災を切に願う。

角大師

横浜の西洋館に春をいける

4月1日～2日　外交官の家　挿花13名



西洋館に春をいける

会期　4月1日～2日
会場　外交官の家
　　横浜山手西洋館の一つ
指導　仙溪・櫻子

家元東京教室の皆さんと一緒に「外交官の家」に花いけた。公益財団法人・横浜市緑の協会が管理し、一般に無料公開している7つの西洋館のうちの一つで、もとは渋谷にあった内田定槌（うちださだつち）（明治政府の外交官）の邸宅だ。

ようこその気持を込めて、季節の花々で各部屋を飾らせていただいた。私達の花を見て、来館された人達の表情が和む。そして花を見に旧友が集まり、再開を喜ぶ場面も。

関東支部長の佐藤慶由さんの父は60年前、ブラジル移民事業50周年記念行事の準備のため、領事としてブラジルに赴任、その時の総領事、副領事の子供達8人が、60年の時を越えて西洋館に集われた。今年はブラジル移民110周年にあたるが、最初に移民事業に尽力したのが内田定槌である。内田大使ご夫妻も、縁（ゆかり）ある再開を喜んでくださっているのではと、お話に花が咲いたそうである。

テキスト 661
2018 年 7 月

ケンチャン

「6月6日はいけばなの日」とは、何事も6才のその日に稽古を始めるといいという故事からきているが、甥の健一郎（ケンチャン）が素子先生（ホッホチャン）にいけばなを習いだしたのは3才だった。毎週月曜日の夜、お弟子さん達に混ざって花をいけていた。その間「テキスト」に連載された「ホッホチャンとケンチャン」の頁も、皆さん楽しみにして下さっていた。

その彼もこの秋には22才になる。スポーツが好きな好青年。家では女性軍によく怒られているが、そんなことではへこたれない。明るく優しいのが取り柄のようである。そして近頃、自分にとっての「いけばな」を見つめなおしているようだ。

テキスト 661
2018 年 7 月

日本いけばな芸術特別企画 in 彩の国さいたま

金沢21世紀美術館で開催された特別企画展から8年ぶりに、様々なイベントを盛り込んだ展覧会がさいたま市の埼玉会館で行われた。

立花、生花、投入、盛花などの様式ごとの展示や、実、葉、根など花材ごとの会場構成になっていて、観る人にいけばなを色んな角度から知ってもらう仕掛けになっていた。

また、杜若の葉組や三管筒の生花などの実演をじっくりと解説つきで見る事が出来たり、私達花道家にとっても大変貴重な勉強をさせていただいた。（写真①）

①

②

③

養護学校の生徒達と、女子サッカー選手のいけばな体験の様子が会場で常時上映されていた。（写真②③）

27 情報ワイド 第3種郵便物認可 京都新聞 2018年(平成30年)6月16日 土曜日

情報ワイド

読者とつながる

京都いけばなプレゼンテーション

華道34流派 熱気あふれ

いけばなの美しさを提案する「京都いけばなプレゼンテーション2018」（京都市など主催、京都新聞など後援）が2、3の両日、京都市中京区の京都芸術センターで開かれた。6回目の今年のテーマは「すごいぞ！　いけばな」。独創的な作品とともに、すぐに使える技を紹介するミニ講座やトークなどが繰り広げられた。京都を拠点に活動する34流派の華道家たちの熱気あふれたイベントの一部を紹介する。（柴山圭子）

自然の趣 大切にして

近藤高弘さん 陶芸家・美術作家 × 田村圭吾さん 京料理「萬重」若主人 × 桑原仙溪さん 桑原専慶流家元 トーク

いけばなと同様、自然と向き合う陶芸や料理、「器・料理・いけばな」をテーマにしたトークで、陶芸家・美術作家の近藤高弘さん、京料理「萬重」若主人の田村圭吾さん、桑原専慶流家元の桑原仙溪さんが、伝統を受け継ぎ、それぞれが意識することや互いの関わりを語り合った。

桑原さんはいけばなについて、「ただ美しい花を生けるだけでなく、『自然の趣』を持って生けるもの」と、個性が開花した戦国時代の花僧侶専必が「専応口伝」に触れ、「いろんな要素があるが、そこは外せない」と切り出した。時代とともに、立花から生花、盛花などさまざまな生け方が生まれたが、「京都はちょっとしたところに、型にはまらない花がさりげなく生けてある」風土をわきまえた在り方が続いていると語った。

田村さんは「おもてなしのこころえとして花を生けるは、人の心が和む。料理はその場の空間を楽しんでもらうもの」と、個食が問題視される現代にあって、人と人が向き合い食事をする重要性を説いた。さらに、現代は安価で合理的な時期の「つどし」桃山時代を象徴する、簡単性が求められがちだが、陰から伝来した完璧な使い勝手に対し、非対称でゆがんだものや割れたもの、ひょうげたものに、新しい価値を見いだした文化性を指摘して、「その両方の側面の使い方が重なりあう空間、『共和』という概念」と持論を展開、「使い手」に委ねられることで永遠性を持った陶器は、花、料理といった一瞬のものを入れることでエネルギーをえられる」と、創作への相互の思いを語った。

器は永遠のテーマ

器と料理、いけばなの伝統を担う3人が、それぞれの魅力や関わりを熱心に語り合った（京都市中京区・京都芸術センター）

京都いけばなプレゼンテーション 華道流派の地・京都ならいけばなの魅力を発信し、文化を担う華道家の育成を目的にしたフェスティバル。点茶、礼儀の作法に茶事を始めるなど、準備を伝えられることになるなど完成された「いけばな百口」に始まり、2013年から有力初日に開催している。

花束 生け替えを指南

美しく束ねられた花束はほどいてしまうのがもったいない感じがする。でも「花束の間はずされている木も少なく、形崩しを楽しんでいる。できるだけ切るほどといてあげて」と、滋州の家元華道家・青田一春さんは、ミニ講座で生け替えのポイントやユニークな「花器」を紹介した。

まず、バケツに七、八分目の水を入れ、ほどいた花束をつけ、水中でサクサクとほぐされる。水中で切ることで、一気に水が上がる」という。10分くらい、そのまま置けておくとなおよいそうだ。

花器や細口がない入のために、ガラスコップやペットボトル、空き缶などに装紙や和紙などを両面テープで巻き付けて飾り、花を生ける様子を紹介した。

さらに、おしゃれな紙袋を花器にする提案、常の食保存容器の中に帰水スポンジを入れ、花を挿すなど提案した。この場合、大きなの袋はスペースを取るため、あらかじめ飾る場所に袋を置いて生ける方がよいとう。

「自分が楽しめる器を見つけ、おうちに花を飾る、ということに挑戦してみて」と呼びかけた。

紙袋の花器も提案

❶花束をいけばなにするのは花と花に距離を与えること❷コップに用紙を巻くだけで自分だけの花器ができる❸長方形の紙袋に花を挿すだけで、部屋のイメージが変わりそうだ。

❸「花」「彩」「風」の異なるテーマで、多彩ないけばな作品を楽しませた

代」と多面的な日本文化の深みを探った。

さらに、いけばなにも料理にも欠かせない器について意見交換した。桑原さんは「花にないなと思う流派された器と生けたくなる器、どちらもある。器の選びは永遠のテーマ」とし、花の合わせ方や、花を強めたときに変化する器の魅力を挙げ、「いけばな」「器の楽しみは、出合い。花と花、花と器、その先に花と人、人と人がある」と示した。

田村さんは、素材を大切にする京料理の心を話し、料理も創作意欲が強すぎると素材を殺してしまう。器も自分の好みのものばかりを使っていたら偏ってしまう」とバランスを意識させた。

造形作品を制作する近藤さんは「作家は我欲に走りがちだ。形や制作、高台の削りなど、制限できるかどうかが、常、使いやすいかどうかはその次」と叱責し、そのうえで、「器の『ゆとり』という言葉と共鳴の意味が重なりあう空間、『共和』という概念」と持論を展開、「使い手」に委ねられることで永遠性を持った陶器は、花、料理といった一瞬のものを入れることでエネルギーをえられる」と、創作への相互の思いを語った。

倉敷市真備町の大水害

7月5日未明から6日にかけて西日本各地を襲った集中豪雨。河川の氾濫や土砂災害によって二百人以上の方が亡くなった。その後の異常なまでの猛暑の中で、被災地では過酷な生活が続いている。

流派内でも数名の自宅が水没。親戚や友人が災難に遭い、復旧のために毎日大変な思いをされている人が多い。

世界各地で増えてきた異常気象。国や地方自治体は、今後増えるだろう自然災害に対するできる限りの対策を講じてほしい。今一度、国民の暮らしを守るという観点から、様々な見直しをしてほしいのに、被災地で断水で苦しんでいる間に、国は水道事業を民間企業に売り渡せる法律を成立させようとしている。政治の怠慢で人々が苦しめられるような人災は無しにしてほしい。

テキスト 662
2018 年 8 月

日本の華道を紹介する番組「花 知道答案 中日名師插花課」

中国のインターネットサイト「豆瓣（どうばん）」の情報番組「豆瓣時間」に協力させてもらった。日中の華道家のいけばなを花材や器、道具の紹介から、いける過程や技術、心得などを動画で紹介する。12人の40作品を視る対価は298元（約5千円）。文化をちゃんと伝えたいという中国スタッフの真面目さに敬意を表したい。

番組制作＝活字文化・日刻。

テキスト 663
2018 年 9 月

避難生活

先月号の2頁、西日本豪雨を6日までとしたのは7日までの間違いです。訂正いたします。

東日本大震災と熊本地震を合わせるとおよそ10万人が未だ避難生活をされている。そしてまた西日本豪雨である。他にも各地で起こった自然災害。温かな支援が継続されますように。可能な限り早く普通の暮らしを取り戻されますように。

テキスト 665
2018 年 11 月

プリンスホテル会員誌エスコート

グランドプリンスホテル京都でのいけばな体験を紹介。宿泊客がお茶とお花を体験できる。普通なら習えない先生の指導を受けられる贅沢な企画なので、是非問い合わせを。

テキスト 667
2019 年 1 月

二〇一九年
己亥（つちのと い）

干支は全部で60種類あり、それぞれに意味がある。

「己」は10ある内の6番目にあたり、精力が横溢する時期を意味する。

「亥」は十二支の最後にあたり、生命が収蔵された核を意味し、新たな始まりの準備時期をさす。

そして「己」と「亥」には「土剋水」という一方が一方を凌駕する関係にある。つまりステップアップの大事な時期にあふれる精力が邪魔をする、調子に乗ると落とし穴にはまるということだ。

また干支には「納音（なっちん）」という別の意味も割り当てられていて、「己亥」は「平地木」、つまり平地に立つ孤高の木という意味がある。

以上をまとめると、二〇一九年は盛んなエネルギーが飛躍のための準備を邪魔するが孤高の継続力で乗りきる、そんな年ということになる。

どんな飛躍をしようか。そのためにどんな準備が必要か。年頭にあたって考えてみてはどうだろう。いい考えが見つかればあせらずに、でもとことんしつこく諦めず、そしてできるだけ丁寧に進めて行くことが肝心だ。

しつこく諦めず丁寧に、いい仕事をしよう。

テキスト 671
2019 年 5 月

令和

5月1日、元号が「平成」から「令和」へ変わった。

先日、倉敷で開催された桑原専慶流いけばな展で、岡山県本部の小野樹仙会長が挨拶の中で次のように教えて下さった。

人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ

「令和」にはそんな意味が込められているそうだ。

令和の時代に華道がどんな役割を果たせるか。人々が美しく心を寄せ合えるような花を、皆さんと共にいけてゆきたいと思う。

テキスト 672
2019 年 6 月

物のこころ

仙溪

昔、年配のお弟子さんに「物にも心があるんですよ」と言われたことがある。京都で袋物を扱う店をされていて、手作りの物へのこだわりを持たれていた。作り手の心が物に移り、そこへ使う人の心も重なっていくと。

その人のお孫さんが先日お越しになって美しい竹籠を頂戴した。お祖母さまが生前愛用されていたとのこと。とても上品な籠花入れである。

作者は丹波篠山の箕浦竹甫さん（1934 ～ 2010）。田辺一竹斎さんに師事して技術を習得、篠山特産の雲紋竹を活用した竹工芸作家として活躍され、その技術は篠山市の無形文化財に指定されている。

丹波篠山の竹は竹細工に向いている。固すぎず柔らかすぎず。固いと折れるし、柔らかいと虫が食う。そんな地元の特性を生かした竹籠づくりに情熱を注いだ箕浦さん。きっとその箕浦さんの人物に惚れ込んで手に入れられたものなのだろう。そんなことを思いながら眺めていると、籠に対する愛着が増してきた。

籠を思いながら花屋に行くと、3色のハナショウブが目にとまった。季節の品格を備えた花だが、過去に籠にいけたことがない。この籠の心が私に作用したのかもしれないなと不思議に思う。竹籠を入れた桐箱には「花籃」と書かれていた。雅な心が名前にも込められている。

テキスト 675
2019 年 9 月

空海

仙溪

先日テレビで空海が辿った中国の道を紹介する番組を見た。

空海は７７４年、讃岐国の郡司の家に生まれ、のち平城京へ上って猛勉強。19歳からは大学での勉学に飽き足らず山林修行をはじめる。

８０４年、第18次遣唐使に学問僧として加わるが、空海を乗せた第４船は嵐のため目的地の遙か南の福建に漂着。福州で許可を得て閩江を船で遡り、陸路で仙霞古道を浙江省へ。富春江を下って杭州に辿り着き、ようやく本来のコースにもどったことになる。唐の都、長安に着いた空海はわずか2年で千人を超える中から密教の正当な継承者に選ばれ、帰国後には高野山で真言密教を開き、万民救済につくした。

番組では空海が体験したであろう多様な自然と文化を紹介していたが、その中で一際印象に残った風景が江郎山だ。高さ３００ｍの２枚岩の隙間は垂直に天を突く。大自然に圧倒されると、人はなんとちっぽけなのかと思う。でも人は自然を糧にしてに豊かな文化を育むこともできるのだ。

私の中では江郎山の絶景と二つ真の立花が重なった。どちらも宇宙の神秘が感じられる。

テキスト 676
2019 年 10 月

台風１５号と消費税

今月から消費税が10％に上がるが、消費税に限らず税の集め方と使われ方は、弱者に優しく若者に活力を与えるようなものであってほしい。また、千葉県など台風15号が残した爪痕に対して国の充分な支援がなされますように。政治に携わる人には私利私欲ではなく誠実さを第一に考えて頂きたい。

仙溪

テキスト 679
2020 年 1 月

二〇二〇年・令和二年 庚子（かのえ ね）

二〇二〇年は子年。干支で言えば「庚子」の年だ。

「庚」は十干の七番目に当たり、植物の成長が止まって新たな形に変化しようとする状態をさす。庚は更に通じ、改まる、入れ替るという意味を持つ。

「子」は十二支の一番目で、土中で発芽したまさにその瞬間。子の字は頭の大きな赤ちゃんを象っている。

「五行」で言うと庚は「金」、子は「水」にあたり、この二つは「金生水」という互いを生かす「相生」という関係とされている。

さらに「納音」という物差しで見ると、今年と来年は「壁上土」という年にあたり、「頑固なまでの不動の精神力を持ち、物事をやり遂げていく」そんな年でもある。

自分の中に秘めた志があるなら、今までできっこないと思っていたことでも、生まれ変わったつもりでチャレンジしてみる。そんな新たな出発の年にしてはどうだろう。

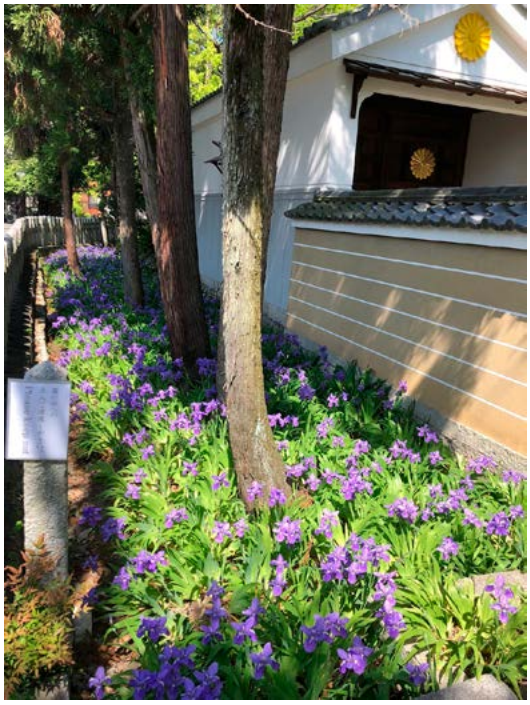
「立花時勢粧」が一六八八年に世に出て、来年で三百三十三年になる。流派の皆さんと力を合わせて、十年ぶりに京都で花展をしたいと考えている。今年はその準備もしなければ。健康に留意していただき、充実した一年となりますように。

上御霊神社の鳶尾

昨年の5月5日に上御霊神社へイチハツを見に行った。今、切り花でイチハツと呼ばれているニオイイリスではなく、本来のイチハツの方だ。

上御霊神社は相国寺の北に位置し、古くは鴨川から別れた川が境内を通って御所へ繋がっていて、神社の堀にカキツバタが群生していたそうだ。神社の近くに尾形光琳の屋敷があったそうで、その当時この地で燕子花をスケッチしていたかもしれない。

昭和初期に川がなくなり堀の水も干上がってカキツバタが消えてしまったのを憂い、20年ほど前に近隣の氏子有志によって乾燥に強いイチハツが植えられ、往時を偲ぶ景色を蘇らせてくださった。



現在のイチハツの景観は、氏子の皆さんによる「いちはつの会」によって植え替えなどの日頃のお世話によって維持されている。

イチハツは古来、厄除け、火除け、風除けの植物として茅葺き屋根の棟に植えられ、災厄から家を守ってくれると信じられてきた。古の花の文化を伝えること、花を大切に育てることは環境にも人の心にとっても良いことである。このことは花をいける私たちこそ大切にしていたい。

京都文化力プロジェクト
2016-2020 Vol.4

くらしの文化を楽しむ
～華道～

桑原専慶流十五世家元
桑原仙溪

自然の美しさを器に凝縮する それがいけばなの魅力

自然の美しさを切り取って器に入れることで、そこに新しい命が芽生え、新たな物語を語り始める。器の中の花一輪が、まるでマジックのように自然の真理を物語る。それがいけばなの魅力です。

そもそも「花を生ける」という文化は中国から伝わり、日本で日本的なものに進化を遂げました。その成り立ちには、自然を依り代として崇拝する樹木信仰など、日本人が培ってきた自然を敬う心、自然に対して神秘的な魅力を感じる独自の感性が影響しています。中でも桑原専慶流は、元禄時代（十七世紀）、桑原冨春軒仙溪によって京都で創流されました。立花の名手だった流祖の仙溪は、「型」が重視された当時のいけばなの潮流に対し、枠にはまらない自由な気風を大切にしました。1688（元禄元）年に仙溪が著した「立花時勢粧」という8巻からなる花伝書はその後の華道の歴史にも大きな影響を与えています。

自然の美しさを器に凝縮して表現するのが立花の醍醐味。桑原専慶流では、代々植物の持ち味を生かすことを大切にしながら、流祖の自由闊達な気風を受け継ぎ、新しいいけばなの創造にも挑戦し続けてきました。十五世家元を継いだ私も、花を大切に思い、「どうしたらその花を生かせるか」と考えながら花と向き合っています。

心を込めて生けた花が 人と人の心を結びつける

いけばなの最もすばらしいところは、「和」を作り出せるところにあると私は考えています。無機質な部屋でも花が一輪飾られているだけで、こころに気持ち良い風が吹き抜け、その場の空気がふわりと柔らかくなる。誰しもそんな経験をしたことがあるのではないでしょうか。ただきれいに見せることが重要なのではありません。大切なのは、自然を敬う気持ち、花を大切に生かす心を持って生けること。そうして自然と心を通わせてきた日本人の心のありさまが、その場に「和」をもたらす。そうした力がいけばなにはあります。

たとえ言葉の通じない相手とも、いけばなを通じて心を通わせられるから不思議です。私自身、海外でいけばなを披露する中で、幾度もそんな経験をしてきました。グローバル化が進む現代こそ、世界の人々とコミュニケーションを取り、「和」をもって世界とつながる上で、いけばなが大きな役割を果たせるのではないかと考えています。

千年以上もの間都だった京都には、全国から質の高いモノや技術が結集し、豊かな文化が育まれました。そうした多様な文化が出合って化学反応を起こし、新たな文化が創造されてきた歴史があります。私の若い頃にも異分野交流を通じて自己研鑽する機会がたくさんありましたが、今の時代は、そうした機会も心の余裕も減っているように感じています。豊かな文化もその担い手である一般市民の方々の心が豊かでなければ次代に伝えることはできません。京都が多様な文化が混ざり合い、未来に新たな文化が生まれるところであってほしい。私もいけばなを通じてそれに貢献していきたいと考えています。

「京都文化力プロジェクト実行委員会」発行の情報誌より内容転載。

テキスト 684
2020 年 6 月

近況

仙溪

4月から稽古をお休みにしていましたが、5月は花にプリントを添えてお届けし、自宅で自主稽古をすることに挑戦していただいてます。いけた花の写真をメールや手紙で送ってもらい批評をお返しするのですが、皆さん初めての試みを新鮮な感じで楽しんで下さってます。

コロナ自粛中に家族総出で家の路地の石を洗いました。黒い小石（那智黒）は表面は綺麗でも、その下は泥がいっぱい。すべての小石を集めて溝をタワシで磨き、小石はバケツでピカピカに洗って元にもどしました。苦労したあとの清々しさと充実感を味わっています。

テキスト 686
2020 年 8 月

花と器

仙溪

このところ、いけばな誕生以前の花と器について考えている。

偶然見つけた石窟内部の写真には花瓶に蓮の花と葉が生き生きと挿されているように見える。その石窟が造られたのは527年。先祖とともに未来での幸せを強く願う思いが込められているようだ（8〜9頁）。

仏前に香を焚き、香水をかけ、香花を散らす祈りの姿が、インドからガンダーラ、敦煌（とんこう）、中国へと伝わる中で、「人の思い」が加わって、いつしか花と器を出逢わせたのだと想像している。

インドから伝わった蓮に対する清浄なイメージと、中国で先祖を尊ぶ象徴の祭器とが重なり合い、最初は花を散らす代わりに空（から）の器に花を入れたのがきっかけで、香水と花を共に供えることを思いつき、器に水を満たして花を挿すことになったのではないだろうか。

いけばな誕生の背景に、壮大な人類のロマンを感じている。

テキスト 688
2020 年 10 月

京都新聞社の新事業として、今年6月から始まったデジタル情報サイト「THE KYOTO」の取材を受け、いけばなへの思いをお話させていただきました。

「花と協力して、何か人をほっとさせる空間を作るのが、いけばなの究極の姿です。だからこそ、花を敬う気持ちがないいけばなは、僕はいいとは思わない。」

文化の力を未来に生かすためのユニークなサイトです。是非一度、覗いて見てください。

『THE KYOTO
文化の未来時評 #5
制御から尊敬へ』↓
インタビュー協力
桑原仙溪
下のQRコードをスマホで読み取るとサイトに行けます。

「THE KYOTO」
文化を知る。
世界を変える。
京都ならではの視点で、文化を知り、未来を考え、育てる。
メディア・サロン・クラウドファンディングを柱とする、文化・アートのプラットフォーム。

花を飾る場所

仙溪

花材　糸芭蕉（芭蕉科）
　　モンステラ（里芋科）
　　アンスリウム（里芋科）
花器　ガラス鉢

　私の家では仕事柄、常にどこかに花がいけてある。稽古の見本にいけた花や「テキスト」の撮影でいけた花がある時は、あちこちに花を飾っている。少し多すぎるかなと思っても、置き方を工夫して、稽古に来られた時にできるだけ見てもらえるようにしている。
　下の写真はもともと茶室として建てられた部屋なのだが、本来の目的にはあまり使わないこともあり、朱塗りの大きな円卓を置いて常に花を飾っている。お客様には別の座敷にご案内するので、この部屋はほぼ花のための部屋になっている。
　改めて考えると、なんと贅沢なことだろう。しかしゆったりした空間だからこそ感じられるものもあるはずだ。花が居心地良く飾られていると、こちらの心も心地よい。シンプルなことだけれど、いけばなとはそんなものなんだと思う。
　こまめに水を入れ替え、悪くなった花や葉を整理し、新鮮な花を加えると再び輝き出すから不思議だ。

9

仏牙舎利が奉安されている多宝塔

鹿王院（ろくおういん） 令和 襖絵（ふすまえ）五十六面落成記念拝観

会期　10月30日㈮～11月14日㈯
会場　鹿王院
　嵐電「鹿王院駅」徒歩4分
襖絵制作　藤井隆也

テキストNo.651でもご紹介した藤井氏が56面の襖絵を描かれたのを見せて頂いた。

鹿王院は足利義満ゆかりの寺で、舎利殿には源実朝が宋から将来したと伝えられる仏牙舎利（ぶつげしゃり）を奉安する。

襖には藤井さんがドイツから持ち帰ったナラ（楢）の葉が一枚ずつ描かれていた。そこにはそれぞれの葉の命の気配があった。居ながらにして森を感じる不思議な体験であった。

今後も襖絵は見られるそうなので、是非訪れてみてほしい。

「私は56枚のオーク（ナラ）の落ち葉を写した。その葉脈を見れる限り注視した。かつて水や養分の通路であった生命活動の証である。それは、1枚1枚の落ち葉を通じて行った命との対話だった。ドイツの地で私と出会い、遠く日本の鹿王院まで運ばれた56枚の落ち葉たちは、稀有な運命を持っていたのかもしれない。」藤井隆也

（鹿王院令和襖絵56面落成記念拝観カタログより）

二〇二一年
令和三年
辛丑（かのとうし）

二〇二一年は丑年。干支の「辛丑」にあたる。

「辛」は10段階の８番目で、字の辛は刺青の針を表し、痛みを伴う幕引きや辛い衰えを意味する。

「丑」は12段階の２番目で、字の丑は指に力をこめて曲げた形を表し、命の息吹が充満している状態。

「辛」と「丑」は「土生金」という「相生」の関係にあり、相手の力を生かし強め合う。

「納音」という物差によると今年は昨年と同じ「壁上土」で、地道で堅実、不動の精神。

以上のことからすると、衰退や痛みは大きいが、大きな芽生えを感じる年であり、堅実で強い精神力が求められる。

まさにコロナ禍による試練が続きそうだが、こんな時こそ強い生命力と強い精神で、新たな輝きを生み出そうではありませんか。

花と器

仙溪

中国の青銅器の歴史を簡単に紹介したことから、立花が生まれる前の花と器について調べ始めたが、日本の絵巻に挿花図を探し、中国、インドの遺跡に残された壁画や浮彫に挿花の痕跡をもとめる内に、仏教の供花はいつから瓶に花を立てるようになったのか、などとどんどん興味が膨らんで、なんだか宝探しでもしているみたいだ。

今月号で紹介した中国北方の墓に描かれた瓶花図も大発見である。絵は拙い感じだが、描かれたテーマに心を打たれた。仏のためのものとはいえ、様々な花を育てて大事に大事にいけていたに違いない。

そんな瓶花が仏教の供花に加わったのはいつどこからだったのか。まだまだ宝探しは続く。

京都 日本画新展２０２１

会期　1月29日㈮～2月8日㈪
会場　美術館「えき」ＫＹＯＴＯ
　　ＪＲ京都駅・伊勢丹７Ｆ
日本画出品　楊喻淇「雨火花」

楊さんは台湾からの奨学生として京都造形芸術大学修士課程に在籍され、現在いけばなを健一郎先生に教わりながら、花の魅力の表現を試みられている。

今回「優秀賞」をとられた作品は、秋草立花からの印象をもとに描かれたもので、いけばなが彼女の五感を刺激して生まれた新たな芸術世界である。

（写真③）

テキスト 692
2021 年 2 月

オンライン講座修了のタイミングでレモン登場！

テキスト 693
2021 年 3 月

人と花

仙溪

「人が花と在るあたたかさが身に染みる」

昨年12月号で菊の立花に添えられた健一郎の言葉なのだが、原稿を読んだ時に思わず唸らされた。確かにそう思う。いけばなの価値はそこにこそあるとさえ思う。

先日、植物園でしゃがみこんで写真を撮っている人を見かけたので行ってみると、か弱い小さな花が咲いていた。「セツブンソウ」の札が近くにあり、解説もつけられていた。

自然の輝きを見つけた喜びと言えばいいだろうか。少し大袈裟に言うなら生命の神秘に見とれてしまう。

セツブンソウ
植物園にて

そんな感動を植物園で味わえるのは、植物園の皆さんのお陰である。花を見て、人を感じ、再び感動する。

そんなことを考えていて気づいたことがある。いけばなも同じなのだと。

部屋に花がいけてあると豊かな気持ちになる。花と器が生き生きとしてそこに在り、まわりの空間を活気づかせる。いけた人の花への愛情を感じると更に感動が深まる。

そんないけばなでありたいと思う。

ツバキ群生林

山口県　萩市　笠山（かさやま）

（２０２１年３月18日撮影）

ヤブツバキの群生で有名な萩市笠山は約八千八百年前の噴火でできた火山で、冷え固まった溶岩（安山岩）が、陸上では照葉樹林や海岸植生、海中では藻場（もば）を支えている。人々はその中から木材や石材、海産物を得ることで文化を育んできた。

ヤブツバキは薪（たきぎ）や材木として重用（ちょうよう）され、切り株からは新たな枝が再生し、独特のツバキ群生林が生まれた。

江戸時代には萩城の北東、鬼門の方角にあたるため、毛利藩は笠山一体を立ち入り禁止にし、数百年間自然林になっていたが、明治になって禁止は解かれ、多くの大木は切り倒されたそうだ。

それでも数十種のヤブツバキが五千株、約二万五千本自生している。

群生林の中はツバキだけの世界が広がっていた。全身でツバキを体感できる。

①展望塔に上って群生林を上から見ると、太陽光で葉がキラキラと輝き、幻想的な風景が。

②苔むした溶岩と椿の樹林。葉と花が散り積もる。

③大木は切られた後とはいえ、曲がりくねった幹に年輪を感じる。

深山の空気

仙溪

久しぶりに深山の空気を吸ってきた。30年ぶりの大台ヶ原。晴天のもと、山道を標高１６９５ｍの日出がケ岳をめざす。といっても駐車場からの標高差は１２０ｍほど。気持ちのいい山歩き。

辺り一面ミヤコザサの中を歩く。このササが地面を覆ってしまうと、他の樹木の発芽ができなくなってしまうのだが、昔、台風による倒木を搬出したことがきっかけで、林床が乾燥し、コケ類が大幅に減少してササの天下となってしまったそうだ。更にササを求めて鹿が増え、樹皮が食べられて森の消失が加速する。

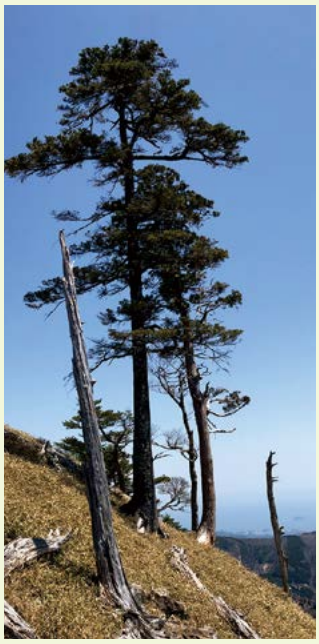
それでもツツジの仲間は頑張っていた。シロヤシオ、アケボノツツジ、ツクシシャクナゲ、サラサドウダン、コアブラツツジ、トサノミツバツツジ、ヒカゲツツジ、等々。花が咲いたらさぞ素晴らしい景色が見られるに違いないが、４月下旬なのに山はまだ晩冬の様相。花の季節に是非また来たい。

過酷な山道を車で走って大峰山の修験者が泊まるという洞川温泉で１泊。湧水ゴロゴロ水をいただいて、龍泉寺、天河大弁財天に参詣し、家族の健康と花技上達を祈願して帰路についた。

大台ヶ原の絶景ポイント、大蛇嵓（だいじゃぐら）。深い谷底の向こうに山並みが迫る、神聖な空気を感じる場所だ。このあたりにはコウヤマキ、ゴヨウマツ、ツクシシャクナゲが見られる。（奈良県吉野郡）

ミヤコザサに覆われた山肌に立ち枯れた木や倒木が白く残る。屋久島にならぶほどの多雨地帯なのに、森が消えていた。正木峠付近。

途中、ツツジのトンネルを抜けていく。またいつか、花の季節に訪れたい。（4 月 21 日撮影）



1963 年撮影の正木峠。（説明板より）昔は苔むす森だった。現在、森林再生の試みがはじめられている。

丹生都比売神社
花盛祭（はなもりさい）　仙溪

ぶらりと一人旅。

花盛祭という名前に惹かれて、高野山の入口にある丹生都比売神社を参拝してきた。（JR笠田駅からバスで30分）

弘法大師空海が高野山に金剛峯寺を建立するにあたって、丹生都比売神社が神領を寄進したと伝えられ、高野山と深い関係にある神社である。

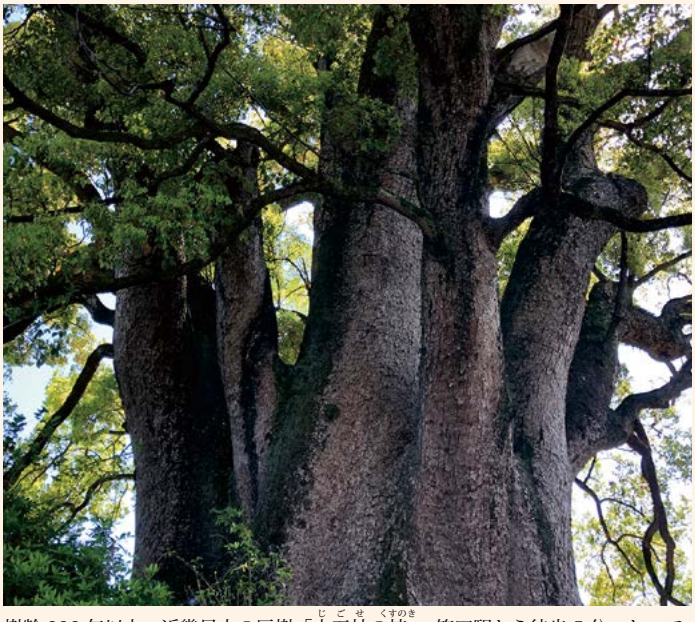
花盛祭はご祭神に花を供え春の訪れを寿ぐ祭りで、季節の花が参道を飾り、神前への供物にも花が添えられる。祝詞奏上、子供達による神楽舞、参拝者の玉串奉奠がおごそかに行われた。

この地は「紀伊山地の霊場と参詣道」の一つとして世界遺産に登録されている。その理由の一つに「神仏習合」がある。お山への信仰心と仏教とが融和した場所。水の神、山の神に感謝し、花を供える。仏前の供花も同じ心で行われていたのだろう。今も昔も、花が人の気持ちの橋渡しをしてくれている。

清々しい青竹に季節の花が。高野山で空海が催した万華会と関係があるのかも。

㊧花を浮かべた石の花瓶。拝殿両脇にあり、古代インドの満瓶を思わせる。

子供神楽の奉納。平安を願う浦安の舞だ。雅楽に鈴の音が重なる。桜の挿頭（かざし）に春を感じる。



樹齢600年以上、近畿最大の巨樹「十五社の楠」。笠田駅から徒歩5分。かつて十五社明神が鎮座する妙楽寺の境内だったが、今は楠の下に小さなお堂が一つ。

和歌山県伊都郡かつらぎ町のJR笠田駅で下車。柿、梅、桃、梨、りんご、ぶどう、みかん等の畑が点在する。

テキスト 697
2021 年 7 月

檜扇

仙溪

扇のような姿に葉をつけるヒオウギは、古より悪い物を追い払う力があると信じられていた。私の想像だが、身につける厄除けの道具としてヒオウギに似せて作ったのが檜扇なのではないだろうか。お雛様が持たれているヒノキの薄板を綴り合わせたあの扇だ。それまではヒオウギの古名「カラスオウギ」と呼ばれていたのが、それ以後ヒオウギと呼ばれるようになった。（のではないだろうか）

もしそうだとすると、檜扇を元に考案された紙扇や扇子も、植物のヒオウギゆかりのものとなる。人と自然の関わりを感じている。

今年もヒオウギの季節がやってきた。力強く晴れやかな姿に生けたい。

テキスト 703
2022 年 1 月

二〇二二年
令和四年
壬寅（みずのえ とら）

二〇二二年は寅年。干支の「壬寅」にあたる。

「壬」は10段階の9番目で生命循環の終わりの位置に近く、次の生命を育む準備の時期。字の壬は「妊む」に通じ、水の兄とは陰陽五行説の「水の陽」のことで厳冬、静謐、沈滞を表す。

「寅」は12段階の3番目で生命循環の初めの位置に近く、誕生を表す。寅は弓矢を両手で引き絞る形から生まれた字で、動き初め、胎動といった意味を持つ。陰陽五行説では「木の陽」にあたり、強く大きく成長することも表している。

「壬」と「寅」は「水生木」という「相生」の関係にあり、水が木を育み強くするイメージ。

「納音」という物差によると壬寅は「金箔金」で、傷つきやすい脆さはあるが本来もっている金の資質を生かすために鍛錬すれば成功につながることを意味する。

大きな成長の前段階として、良い資質に磨きをかけて実力を養う、そんな年になりそうだ。まずは自分自身の良いところを再認識しよう。

立花時勢粧３３３年

仙溪

江戸時代前期の１６８８年（貞享５年・元禄元年）に桑原冨春軒仙溪の『立華時勢粧』が木版刷りで出版されて今年で丁度３３３年になる。

１１８の絵図からなる『立花時勢粧３巻』と、花材の解説から始まる立花の手引き書『立花秘傳抄５巻』の合わせて８冊からなる花伝書である。

以前この「テキスト」でその膨大な内容を５年半にわたり紹介したが、一つとして同じものの無い絵図には植物の個性と息吹が見て取れ、また様々な故事や書物を引きながらの手引き書は、流祖の豊富な知識を感じると共に、揺るぎない花道理念が伝わってくる。

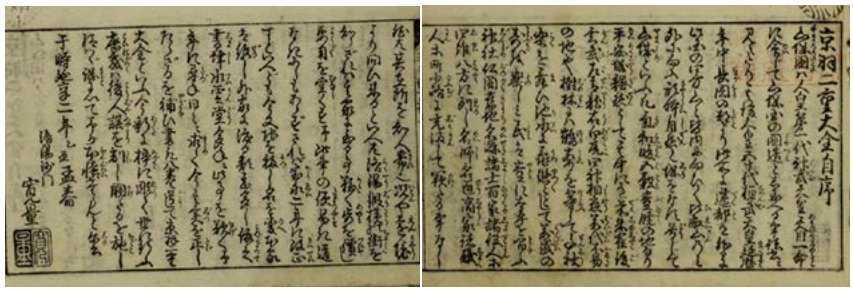
植物を見つめその生命を尊重し、自然の妙を花と共につくることが、桑原専慶流いけばなの根本理念だと気づかされる。

さて、延享２年（１７４５年）の京都案内『京羽二重大全』に「立花師　富春軒桑原仙溪流　桑原権左衛門」とあるので紹介しておきたい。

１６８５年の初版以降何度も改正版が出ていて、時代順に見ると流派が増えていく様子がわかる。

「立花時勢粧」３３３年と「テキスト」７００号の節目に、流派の歴史を振り返ってみた。

①

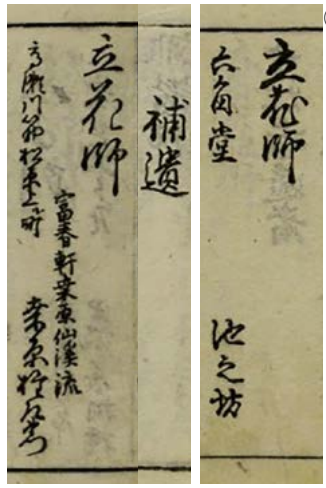


『改正増補・京羽二重大全８巻』延享２年（1745）の巻１序文。

『京羽二重』は京都の実用的な地誌・観光案内で「諸師諸芸」の項目に茶湯者などと共に立花師も紹介されている。
初版（貞享２年（1685））では立花師は「池之坊」と「大住院」だったのが、60年後の改正版（①②）では「池之坊」に「富春軒桑原仙溪流」が加えられている。

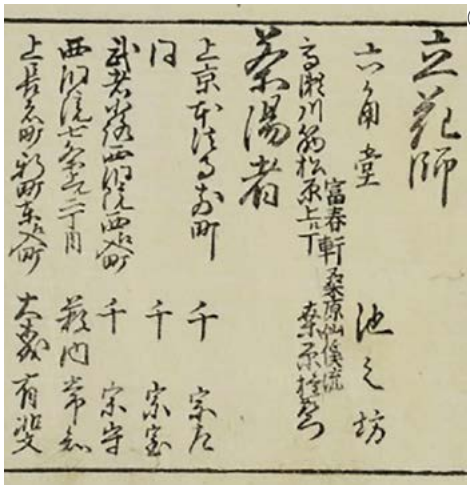
出展①②③④：京都府立総合資料館所蔵（ARC 古典籍ポータルデータベース）
https://www.dh-jac.net/db1/books/results.php?f3= 京羽二重

②



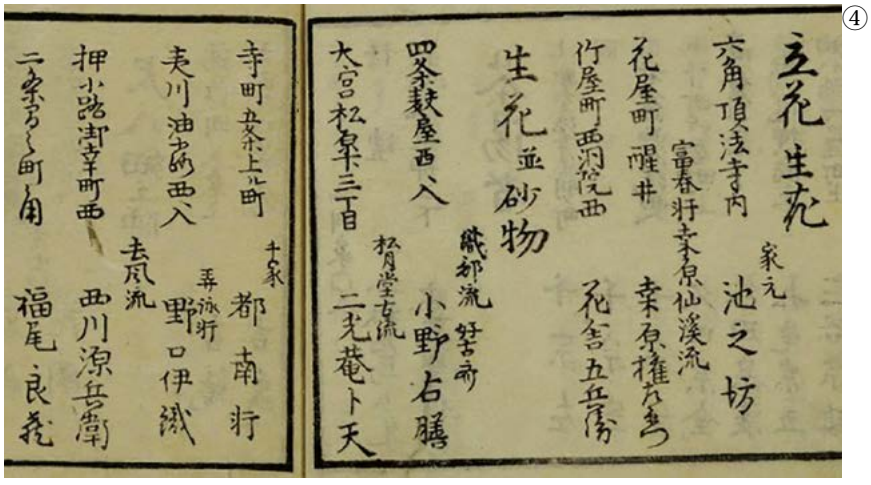
『改正増補・京羽二重大全 巻の三』
延享２年（1745）の部分。
出版間際に富春軒桑原仙溪流が加えられている。５世家元の頃か。

③



『明和新増・京羽二重大全 巻の三』
明和５年（1768）の部分。
延享版に続き「立花師」として池之坊と当流が紹介され、続いて「茶湯者」５人の名があり当時の様子が偲ばれる。

④



『文化増補・京羽二重大全 巻の三』文化７年（1810）の部分
「立花 生花」「生花 並 砂物」に９人を紹介。

文阿弥花伝書

仙溪

縁あって鹿王院で花をいけさせて頂けたので、鹿王院に伝わる『文阿弥花伝書』のことに触れておきたい。

この花伝書（3巻の巻物でおそらく後世に書き写されたもの）は供花の功徳や挿法・飾り方について仮名交じり文で書かれ、所々に彩色の絵図があり、各巻末尾に綉谷庵文阿弥の名がある。

序文に、仏前の供物の中で花を最も尊いものと位置づけ、花を嗜むことで現世で楽しみ来世で救われることができると説いている。

花伝書としては最初期の内容と思われるのだが、詳しい研究がされていないのが残念。ここに序文全文を紹介する。

（『大和文華 第48号』掲載の釈文（読みやすく直した文）を参考にしたが、段落で区切り、仮名を漢字にするなどした。間違いがあればご指摘願いたい。）

序曰

夫れ、この界は須弥の南贍部州、天笠太唐日本三国之に同じ、其の中に於いて我が朝万勝たり。

先ず神国なるがゆえに仏法に近し。諸宗の元祖三国に渡るに、諸経論秘伝尤もこの国に収まるなり。されば日域に生ずる人、知恵のかしこき事万鏡を磨き、心のゆるき事四海に満つ。

しかりといえども、その身の嗜み学する事は身躰に影の応ずるがごとく、心闇々たれば影うつる事なし。玉磨かざれば光なきがごとし。たまたま請けがたき人生を請け、生まれ難き国に生ずる事有り難き宿因と思い、一弾指の間もいたづらに日を送る事なかれ。ここをわきまえざる人はなげかしきや。三界六道に輪廻し悪道に堕せしめん基なるべし。今生後生のために諸芸を嗜むべし。

しこうして仏神三宝に六種の供物あり。その中にとりわき花供尤も勝りたり。又翫ぶ事私ならず、この道に深くわけ入り、深真不思議の信号を六ちんにそみ（六陳に染み？）、教えの如くに翫ぶならば、仏道修行にもここ無二無三の教行にあらずや。

先ず躰色この理をもってとるに、地水火風空の五躰なり。青黄赤白黒、色これに顕れ法報応の三身もこれあり。五音に五の響きまでも顕れたり。そのゆえは五躰六色具足しぬれば、すなわち三身万徳の悟りあり。これを識る事は易かるべきかな。又難かるべきかな。ただすべからく師の伝来をもって教えとす。

心に得たるところをもって悟りと定むべしや。心を千またにわかち、勢を天地に馳せてこの道を心えべき事肝要なり。たとえば万木千草ことごとくもって四季折々の風情をたもつ事、釈尊の深入禅定観見法界、草木国土悉皆成仏と法華経に説きます事も、釈尊一念の上なるべし。森羅万象有情非情の上をなべて草木国土と名をさしてのべ給うと見えたり。何事か疎かならむや。

松杉をしん（西教寺に伝わる文阿弥花伝書には「身」の字が使われている）に用うは真如実相の心と得べし。開落の花は随縁真如の道理と心得べし。又四季に変ぜざる草をば不変随縁とも真如平等とも観すべし。花を翫ぶ事は仏世にたとえば釈尊一代教法には華厳経の説と心得べし。もっとも荘厳第一の

文阿弥花伝書と伝わるものは滋賀の西教寺に7巻、九州国立博物館に残巻1巻、他にもあり、鹿王院のものには天承元年（1131）の日付がある。

『特別展 いけばな 歴史を彩る日本の美』図録より（2009）p42-43

鹿王院山門からの長い石畳。苔生した紅葉の林を真っ直ぐな道が続く。清浄な空気に癒やされる。

利益なり。花を挿げる室には諸天来迎あり、天人も影向したまうなり。

春は諸花の開落の枝をまじえ、匂ふんぷんとして袖にうつる事は、栴檀の林に入りてさながら栴檀を翫ぶにことならず。峨々たる枯れ木のこずえは鉾を立てたるがごとし。苔のひまよりみどり少々わひ出、若木をそねむに似たり。沙羅双樹のかり（殯？）に色を変ぜしがごとく。

夏はかきつばた花あやめなど水辺に咲ける趣で、すなわち涼しき事これを思うに江南の野水に戯れるがごとし。

秋は千種の花の朝露にかたぶき、己々の色をうつし、又夕時雨一通りのあとうち湿り、しどろに伏し違うを見るに、などか心を掛けざらん。

冬は山野悉くおしなべて霜雪に草木うづもれ、儚き思いにも堪えぬべきところに、傍らを見れば一もと菊の散り残り、虫の住みかの名残かと哀れなり。

又山橘、深山樒などいうものの実に色をなし、葉に水をふくみ青々明々とある事をみれば、また枯れ果てぬ世の有様と頼みあり。

めづらかに面白き事、いかなる慳貪放逸の人かこれをそねまんや。四季折々の無常を知って、有為の転変を悟らざらんや。生老病死の理をしるべきも、尤もこの一瓶のうちに漏れんや。

道俗男女在家出家貴賤上下ともにこの花を翫びなば、当来にては心を慰み客をもてなし、来世にては仏の会場に往詣して、種々の曼荼羅に座し、種々の花を翫ぶ事疑いあるべからず。

挿げる道より悟りを開かん事決定なるべし。委才覚のおもむき、この一巻のすえに顕了す。ただ古今の師伝にまかせ、かくの如くなるべし。穴賢他見あるべからず。これを秘すべし。

又曰く、花を立つ事、仏在世より今に至るまで戒定恵の三学をしめし給うその第一なり。香花火をもって三学を示し給うと見えたり。

（このあと巻1に72、巻2に67、巻3に9の事柄が書かれている。）

仏教と花の関係

文阿弥花伝書の序文を読んでいて、「仏教」と「花」の関わりについて新鮮な発見をした。

文阿弥は「万木千草ことごとくもって四季折々の風情をたもつ」この世界で、季節の移ろいを感じながら花を挿す行為そのものが「悟り」に繋がる崇高な「嗜み」だと力説している。

仏教の供花がいけばなの源流の1つと分かってはいたが、それは形式だけではなくて花を挿す精神も育んでいたのだ。

仏教僧が釈迦の教えに近付こうと花を挿すうち、花も人と同じなのだと気付きそれこそ釈迦の教えと悟る。花を慈しみその個性を生かすように挿した供花が自分も含めた人々の心を癒やす。そして何より花を挿すことでより良く生きるための道がひらける。日本に生まれてこんなに素晴らしいことをやらないなんてもったいない、と文阿弥は熱く語っている。

花を尊ぶ気持ちが良いいけばなを生むのだと最近つくづく思うようになったが、彼は同じことを書き伝えてくれている。

足利義満筆「鹿王院」の額と客殿。
襖絵の枯葉、屏風絵、花。それぞれが響き合い呼吸する。

鹿王院の舎利殿（現在修復中）。
中に源実朝が宋から招来した仏牙舎利（釈尊の歯）を安置する多宝塔がある。

「文阿弥花伝書」の謎

前回序文を紹介したが、「文阿弥花伝書（鹿王院蔵）」には謎めいた所がある。

文阿弥は室町時代の「たて花」の名手で足利将軍に仕えた同朋衆の一人。

1，巻末の年号と日付の謎

天承元年　五月十三日

天承元年は 1131 年、平安時代だ。5月13日という日は巻3の最後にも「五節花の事」として「五月十三日 竹」とある。これは中国の俗説「竹酔日」のことを指していると思われる。この日は竹が酔っているので植え替えに最適な日とされた。

天承元年を調べてみると、宇治に蟄居していた藤原忠実が鳥羽上皇に呼び戻された年にあたる。

常識的には花伝書の内容が平安時代のものとは考えにくいが、なぜこの年号と日付を敢えて使ったのか。植え替えた竹が根付き育つ如く、挿花の極意を伝授する意味で花伝書相伝の日付としたとも考えられる。

「五月十三日 竹」以外にも「菊ばかり

立てず」と書かれていることなど、他の花伝書には無い内容があり興味深い。

2，「花の書」「紀貫之」「宇治の宝蔵」「玉津島明神」

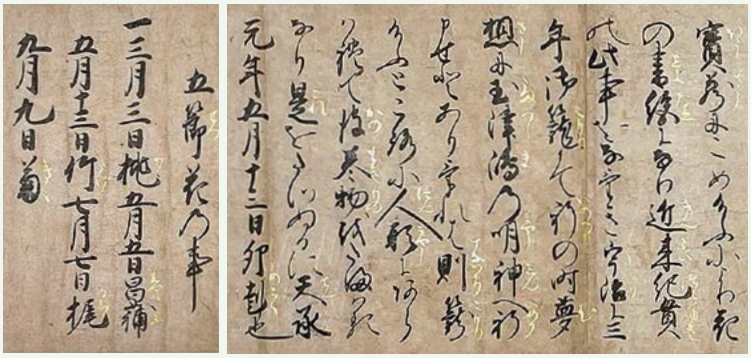
わが朝において、花の書宇治の宝蔵に込めたまうより花の書絶になり、近来紀貫能この事をなげき、宇治に三年お籠候て祈の時、夢想に玉津嶋の明神へ祈申せとありければ、則ち籠給うところに人形にあらわれて彼巻物を賜るなり。これをたづぬるに、天承元年五月十三日卯の刻なり。

巻3に右の文章があり「花の書」なるもののことが書かれている。

紀貫之（872~945）と玉津島明神の関係は能の「蟻通」の中でも語られる。紀の国・和歌浦の玉津島明神は和歌の神様であり、貫之も参詣したであろうことが「貫之集」からうかがえる。その帰途に和泉国の蟻通明神で詠んだ歌を題材に能の「蟻通」がつくられた。

紀貫之の書いた「土佐日記」は和語和文和字による日記文学の魁けである。また彼は古今和歌集の編纂のあと、宮中の書物を管理する御書所預に任ぜられている。日本的なるものを生み出した紀貫之に、宇治の宝蔵で「花の書」を見つけさせたのには、何か意味がありそうだ。

「花の書」とはいかなるものを指すのか。古い時代の供花について、その挿法を記したものだろうか。



『文阿弥花伝書・鹿王院蔵』巻３の部分。㊨花の書について、㊧五節の花に五月十三日竹とある。　『特別展 いけばな 歴史を彩る日本の美』（2009）より

玉津島神社の北西にある雑賀岬展望台に登った。古の「若の浦」もこんな景色だったのでは。

玉津島神社

私も明神様から花道の極意を授かろうと玉津島神社を訪れた。（11月13日）

上古より天照大神の妹神である稚日女尊をご祭神とする。またの御名は丹生都比売神である。

紀ノ川の河口に位置し、潮の干満差が大きく、満潮時には干潟に点在する山が海面に玉のように浮かぶ島となったそうだ。周辺は美しく稚い浜辺「若の浦」と呼ばれたが、聖武天皇によって明光浦と命名、又いつしか「和歌の浦」とも呼ばれるようになる。歌に多く詠まれており、衣通姫尊も祀られるようになってからは和歌三神の一社として崇められてきた。

和歌山市には未知の古墳が多く眠っていると聞く。「花の書」ゆかりの玉津嶋明神について、ますます興味が湧いてきた。

玉津島神社の紋。玉（宝珠）と菊だろうか。白波を白菊と見る和歌がこの地で詠まれている。

「花の芸術」

立花時勢粧３３３年
桑原専慶流いけばな展

コロナ禍での流展でしたが、風通しの良い設えでゆったりした展示にしたため、過去に経験したことがないような花展になりました。

「花を観賞する」ではなく「花と時を過ごす」ような新鮮な感覚を持たれた方も多かったと思います。

全てのいけばなを横や後ろからも見ることができ、向こうにいけられた花との重なりも心和む景色になっていました。

会場入口では次期家元の力強い松一色砂の物が迎え花となり、会場内では私と副家元の桜の大作が31席のいけばなを見守ります。

その31席は各期総替えとなって、それぞれの期の景色をつくっていました。

私達の３作は６日間毎日水を入れ替えて展示。副家元の桜は次第に花色を濃くし、私の桜は会場で花が咲き、葉が居心地よさそうに広がっていきました。

ご来場下さった皆様に厚く御礼申し上げます。

開催が危ぶまれる中、素晴らしい花材が集まったことに心から感謝しています。

コロナの規制で来られ無かった皆様とも、ウェブ上で花展の様子を共有できました。全出品作の写真と花の名前、器の作者名をご覧いただけます。立花時勢粧のことを知って頂きたい思いで作った解説パネルも公開していますので、いつでも覗いてみて下さい。

皆で花をいけることが何か世の中のためになることを願い、入場料全額を京都市に寄付させていただきました。他流の先生方にも入場券を買ってご覧いただくこととなりましたが、皆さん快くお越し下さり、また共感のお言葉も多く頂戴しました。いけばな文化が社会を育む方法として、このような花展もあって良いと思います。

いけばなは花と協力することで生き生きとした美をつくりだす芸術なのだと、改めて実感しました。

仙溪が立花で立てた桜の大枝は家元宅の庭に。信楽焼の大壺にいけられた桜とレモンとメイ。
突然あらわれた桜の枝には、猫たちのほかにも時折小鳥がやってきます。

「花の芸術」展特設サイト
花展の様子をご覧頂けます。
kuwaharasenkei.net
下のQRコードをスマートフォンで読み込んでください。

マンチェスターで活躍中！

イギリスのマンチェスターで、ＩＫＥＢＡＮＡ教室が街の人達に憩いと安らぎを提供している。

ＪＵＮＫＯさんは桑原専慶流師範。卒業旅行でイギリスへ行った健一郎が５週間ご厄介になった人だ。流派の自然本位の考え方を大切にしつつ表現はＪＵＮＫＯスタイル。「花と共に美をつくる」いけばなの精神が、アーチスト魂に火をつけたようだ。

インスタグラムでその様子を見ることができる。

街の広場でいけばな体験を楽しむ人達。コロナ禍の制限がゆるまり、身近な花に触れながら、創造の喜び楽しみを味わわれたことだろう。開放的な空間で、いけばなが人々の心に優しく語りかける。

ＪＵＮＫＯさんは今、いけばなでイキイキしている。

（写真①②③）

「花の芸術２０２２」作品集

立花時勢粧解説付き

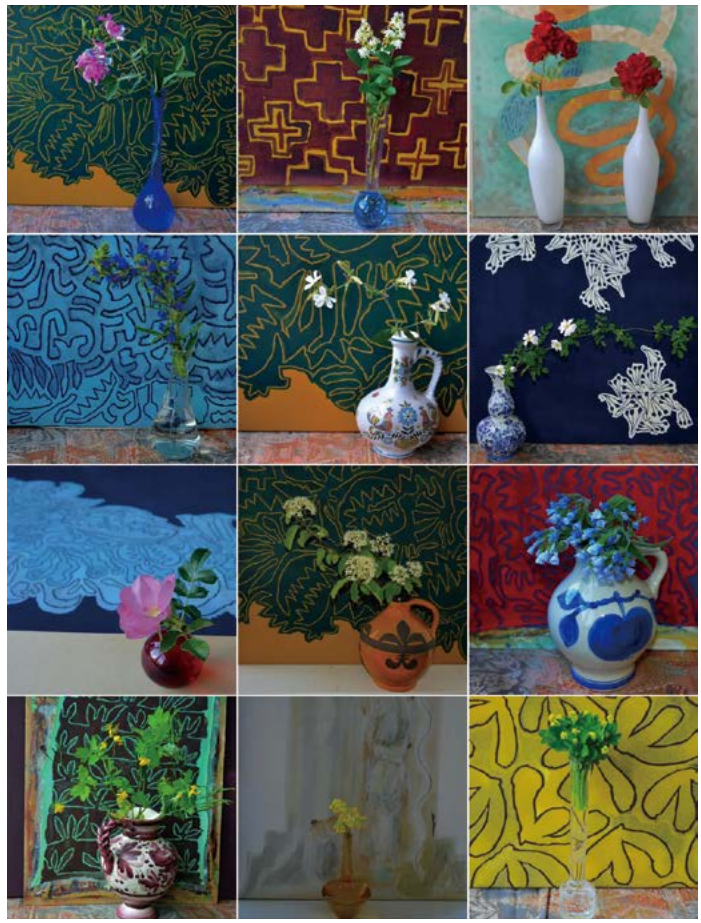
Ａ４版　１２８頁

３３００円（税込）

立花時勢粧３３３年、「花の芸術」桑原専慶流いけばな展の作品集をつくりました。

ご希望の方は家元事務局へ。

（０７５　２２１　２９５０）



藤井隆也さんのインスタグラムには藤井さんの作品を背景に毎日のいけばなが（５年前から一日一作！）、、、。日本でもドイツでも、季節の一枝を仕事場にいけて楽しまれています。@fujiitakaya

藤井隆也氏のアートと挿花

日本とドイツを拠点に創作活動を続けている藤井隆也さんは桑原専慶流の師範でもあります。

ドイツで拾ったオークの枯葉を拡大して描かれた絵が、京都鹿王院の襖絵として納められています。

昨年に続いて今年も９月に、鹿王院で新作屏風絵の発表を予定されています。期間中はオークの襖絵も見せていただけるそうです。

藤井さんは５年前からアトリエ近くの自然を撮った写真とともに、１日１点、器に花をいけてインスタグラムに投稿されています。

挿花の背景には藤井さんの作品が。自然の中に身を置いて生み出される模様と、実際の花が響きあっているような。是非一度覗いて見て下さい。

京都市芸術文化協会賞 受賞　桑原仙溪

このたび、京都市芸術文化協会に所属し、芸術文化活動が特に顕著で、芸術文化の向上に多大の功労があったと認められる者として、表彰していただきました。

受賞に感謝し、今後一層、華道の研鑽ならびに発展に尽力してまいります。　仙溪

岡山県本部主催
夏季研修会
華やいだ暮らしの設え

会期　7月3日(日)
会場　ライフパーク倉敷
　　大ホール
参加　約90名
内容　家元パフォーマンス
　　いけばな実習
　　「バラをいける」
　　いけばな展示
　　岡山県本部役員

疫病退散の願いをこめて、いきいきとした花からパワーをもらってもらおうと、岡山の先生方が力を合わせてイベントを開催して下さった。

舞台両端には手作りの床の間や応接セットが設置され、花の飾り方を解説。中央の大作は織姫と彦星にみたてた花を即興でいけた。

厄除けの檜扇にあやかって扇形の葉をもつ竹著莪(たけしゃが)、棕櫚(しゅろ)竹(ちく)を使い、邪気を吹き飛ばす力強いいけばなになった。

植物散歩

仙溪

途中でいろんな花に出合えるのが山登りの楽しみなのだが、それには時間と体力が必要だ。家から日帰りで気軽に自然を楽しめる場所を訪れて、植物散歩を楽しんでいる。

7月には華道家仲間と六甲山高山植物園に行った。コアジサイの紫色の花柄に見入り、ギボシの花の蕾が丸くて可愛いかった。

8月には京丹波町和知の「わち山野草の森」を訪れた。九百種の植物が育ち、四季を通して楽しめる。オミナエシが眩しく咲いていた。途中、由良川沿いの田園風景に癒やされ、鮎の塩焼きと地酒も堪能した。別の季節も楽しみである。

㊨クサギの花が咲いていた。
㊧道を歩くカニ。（和知にて）

13～15日 鴨島文化サロン作品展

3年ぶり 待望の再開

1974年から吉野川市で続く鴨島文化サロン作品展が13～15日、鴨島町鴨島の本町ビルギャラリーで開かれる。47回目。民間の発表の場として県内最分け。初期から多彩なジャンルの作品が一堂に並んだが、コロナ禍で一昨年、昨年は中止になったが、発表を待ち望む芸術愛好家とファンに応えて3年ぶりに再開される。

作品展は、本町ビルで民間発表の場を設ける藤原茂喜さん(73)が主宰する文化サロンが「趣味でもの作りをする人と気持ちを一つにし、気軽に楽しむ、作品を発表できる場を提供しよう」とスタート。数の時期に開いてきた。

出品者は口コミで集まった。当初、芸術愛好家が作品を発表できる場は、徳島市の丸新ビル他の公的施設に限られていたとあり、個人や小規模団体から注目された。徳島市や近隣市町村からの出展者も少なくなかった。

作品のジャンルは絵画、工芸、書道、写真、生け花、ちぎり絵、アートフラワーなど多彩で、年によって増減する。限られた空間を有効に利用するため、書画や絵画の前に生け花や立体作品を置く場合も多い。手作りでユニークな新出どして展示している。初回以降、阿波和紙伝統産業会館の協力で作っている和紙和紙のパンフレットも人気がある。

今回は、水墨画、油彩画、書道、生け花、写真、ちぎり絵などが出品。

第1回から生け花を展示している青柳川市鴨島町の華道家田園さん(82)は「展示台が比較的自由で規約もなく、文化に気軽に触れられる家族会発表の場。各ジャンルの芸術愛好家と交流でき、学びにもつながる」と語る。

藤原さんは「文化力を高めるには作家が集い、発表できる環境が重要。作家の意欲化は尽きない。文化に積極的に関わる人たちと一緒に続けたい」と話している。

（尾野益大）

民間発表の場 県内草分け

ジャンル多彩、ユニークな展示

【上】多彩なジャンルの作品が並べられ、【下】展示方法がユニークで、書画の前に生け花を飾ることもある＝2005年、いずれも吉野川市

徳島新聞　8月11日㈭朝刊

徳島だより

毎年お盆の頃、華老の武田慶園先生とお弟子さん達は地域の文化サロン展に大作花をいけ続けておられ、今年で47回目となる。サロンを主宰する藤原茂喜さんは「文化力を高めるには作家が集い発表できる環境が重要」と：。貴重な集いの場だ。

テキスト 714
2022 年 12 月

実り

仙溪

栗の渋皮煮を頂戴した。鬼皮だけを剥き、渋皮を美しく残すには熟練の技がいる。砂糖で煮るだけのシンプルな作り方だそうだが、飴色の見た目も美しく、柔らかで甘くて美味しい。

ちなみに調べてみると植物学上では鬼皮が果肉で、渋皮は種皮、その内側が種子にあたるので、種を食べていることになる。

他にもイチゴは花托がふくらんだもので、表面のつぶつぶが果実にあたるそうだ。一つの花にめしべが百以上あるためにそうなる。

植物が子孫を残す工夫は千差万別だが、種子を宿した「実り」の姿はそれぞれに美しい。

見て食べることに加えて、いけて実りを味わっている。

テキスト 715
2023 年 1 月

二〇二三年
令和五年
癸卯（みずのとう）

二〇二三年は卯年。干支の「癸卯」にあたる。

「癸」は10段階の最後。次の生命を育む準備が完了した状態。水の弟とは陰陽五行説の「水の陰」のことで小寒、閑静、渋滞を表す。

「卯」は12段階の4番目。草木が地面をおおう状態。陰陽五行説では「木の陰」にあたり、控えめに成長することを表している。

「癸」と「卯」は「水生木」という水が木を育む「相生」の組みあわせなので、寒さが緩んで萌芽を促す年ということになる。

「納音」という物差によると「癸卯」は昨年の「壬寅」と同じ「金箔金」で、鍛錬すればもともと持っている金の資質が磨かれて力を発揮することを意味する。

京都では中学校いけばな体験教室が全校で行われるようになった。生徒達が花を大切にいけている姿を見ると、いけばなが持っている本来の力に気づかされる。

花のいのちが人の資質を磨く。

立華時勢粧を読む ⑥④

仙溪

立華時勢粧の立花秘傳抄には和歌が多く引用されていて花の異名※を知る事が出来る。松、竹、梅で流祖が選んだ歌を紹介してみよう。

松

蔵玉集

大内や百敷山の初代草※いくとし人のなれてそゆらん

同

春の野や雪げの沢の延喜草※花咲きにけり雪におわれて

神山のふもとに植える千世見草※うえおきてこそ御調物なれ

竹

通用の證歌

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我が身は成りぬべきなり

古歌

秋風はまどなる竹にかよふなり河玉草※をなにといふべき

月にきく夕玉草※の秋風に音はいつ頃寝覚めとはまし

梅

古歌

万代に咲るなかにも初名草※春をまたでや花を見るらん

深山には見雪ふるらし難波人浦風しほる香栄草※かな

山里の軒端にさける風見草※色をも香をも誰見はやさん

「蔵玉集」とは室町時代の歌学書で、草木・鳥獣・十二月の異名などを詠んだ歌を集めて解説を加えたもの。連歌の参考辞書のようなもので、その前には「莫伝抄」があった。

「蔵玉集」は二条良基（1320～1388）が、「莫伝抄」は源俊頼（1055～1129）がまとめたとされている。

源俊頼は平安時代後期の貴族、歌人で、歌論書「俊頼髄脳」はのちの歌人に影響を与えている。

二条良基は南北朝時代の公家、歌人、連歌の大成者とされている。

連歌とは日本古来に普及した伝統的な詩形の一種で、短歌の上の句（前句）5・7・5に別の人が下の句（付句）7・7を即興的に詠んで完成させる短連歌と、発句5・7・5と脇句7・7を交互に複数人で詠み連ねていく長連歌がある。

先日、南座での顔見世歌舞伎興行に片岡仁左衛門さんが出演されたので見に行ったが、仁左衛門演じる元平戸藩主、松浦鎮信侯は連歌が好きで、歌の師匠・宝井其角を屋敷に呼んで家臣と連歌の勉強会のようなものをする場面があった。

歌舞伎「松浦の太鼓」の一場面
出典：こんぴら歌舞伎オフィシャルサイト

時は元禄15年12月14日、赤穂浪士による吉良亭討ち入りの日の設定。松浦侯は赤穂浪士が仇討ちする様子も無く1年が経つ不甲斐なさに苛立っていたところ、其角から赤穂浪士との昨日の風流なやりとりを聞き、ちょうどその時聞こえてきた陣太鼓の打ち方から討ち入りを悟り、自分も助太刀に向かおうとする。松浦侯の喜怒哀楽の表情にどっと場内が沸いていた。

この歌舞伎の鍵となるのが連歌と陣太鼓だ。前日に赤穂浪士の一人、大高源吾が其角との会話の中で、

「年の瀬や　川の流れと　人の身は」

と其角が言ったあとを受けて

「明日待たるる　その宝船」

と源吾が返したことを聞いた松浦侯。その意味するところを思案していたところに聞こえてきた陣太鼓。「バン、ドンドンドンドンドン」それはまさに自分が学んだ山鹿流の太鼓であり、同門に大石内蔵助がいたことを思い出す。そして打ち手は内蔵助と確信し狂喜する。

話が立花時勢粧から逸れたが、冨春軒が花材解説に選んだ歌に「蔵玉集」という連歌の辞書からの引用があるのは、自らも連歌を嗜んでいたのだと思う。前句に対し即興で機知に富んだ付句を詠むのは、個性ある枝や花を自在に合わせて立てる立花と似ている。どちらもその時代の風流なのだ。

神の柱・壱岐島

仙溪

正月明けに「天と地を繋ぐ神の柱」の名をもつ島を訪れて神社巡りをしてきた。

対馬とともに古くから大陸との交易の拠点として栄えた壱岐島（長崎県）。中国の歴史書三国志（3世紀）の『魏志』倭人伝にも「一支国」の名で登場する。『古事記』の国生み神話では5番目に生まれ、神々が行き来するための天と地を繋ぐ柱「天比登都柱」であると記されている島だ。島内には150社以上も由緒ある神社が点在し、280基の古墳に加えて弥生時代の遺跡も発掘されている。

南北17キロ、東西14キロの小さな島だが、ほとんどの食材が島内で賄える。海産物、農産物、畜産や養鶏、養殖によって自給自足が可能な恵まれた島だ。想像するに太古より交易の拠点であると共に、豊かな自然の恵みをもたらす神への祈りの場でもあったのだろう。

しかし人や物が行き来する場所は平和な時代はいいが、隣国が領土を広げようとした

内海湾の小島神社。潮が引いたときだけ渡れる。祭神は素戔嗚命。

シマカンギクとクロツバキ。

潮が引くと天然の牡蠣も現れる。島のおばさんが身を採り集めていた。

猿に見える「猿岩」は壱岐島誕生の神話によると島を繋ぎ留めた8本の柱の一つ。

過疎化で空いた畑ではバナナ栽培が。無農薬で皮まで美味しく食べられる。

島内のしめ縄にはヤツデの葉が。ヤツデには魔除けの力があるためか。

白沙八幡神社の鎮守の森は神秘的。写真は威厳あるイヌマキの巨木。

場合は侵略の犠牲にもなる。壱岐には女真族による刀伊の入寇（1019）と元寇襲来（1247・1281）によって蹂躙された苦しみの歴史がある。

しかし現在は自然の恵みに支えられた穏やかな島だ。神への祈りは今も引き継がれ、現職の神職のみで行われる壱岐神楽は秋から冬にかけて島中の神社で奉納されているそうだ。

今回の旅では壱岐の食材を堪能した。クロアワビ、サザエ、クエ、ノドグロ、ミズイカ、壱岐牛、ママなかせ（トマト）などなど。麦焼酎は壱岐発祥だそうだ。最近では地ビールやバナナ栽培も始まっている。

訪れた幾つかの神社では感謝とともに願い事もさせていただいた。断崖で強風を、砂浜で穏やかな波を、鎮守の森で巨木を体感したことも、神の柱の島を印象深くさせる。

目に見えないゆえに畏れ、目に見えないゆえに敬う。神とはそういうものなのだろう。命を育む自然の大いなる力に神を感じる。自然の恵みに感謝し尊ぶ気持ちを忘れずにいたい。壱岐島は神を感じる島であり続けて欲しい。

奈良・平安朝よりの白沙八幡神社、祭神は神功皇后、応神天皇他。拝殿は平戸藩主・松浦鎮信が寄進した 36 歌仙図に因んだ絵で埋め尽くされている。

先月号で紹介した松浦鎮信縁の地。これも何かのご縁。

島の東端、左京鼻から玄界灘を見る。壱岐島誕生の神話で島を繋ぎ留めた「折れ柱」の一つ「観音柱」が荒波に洗われる。海の向こうには宗像大社の境内地であり「神宿る島」沖ノ島がある。

いけばなは最先端！

仙溪

いけばな本来の魅力とは何だろう。

昨年3月の流展「花の芸術」いけばな展では大きな手応えを得られた。コロナ禍の中だったので入場者は少なかったけれど、「花が生き生きして見える」空間づくりにこだわったお陰で、いけばなが本来持っている力を今まで以上に効果的に感じてもらうことができた。

いけばなの魅力って何ですかと問われれば、その答えには色んなことが思い浮かぶが、最近特に感じているのは

自然の命を活かす芸術

ということ。シンプルだけどとても大切な、いけばなが持っている最大の特徴だと思う。

先月、他流の先生方と企画した勉強会で講師を招いてお話を聞いた。テーマは「反集中」。NPO法人「ミラツク」代表の西村勇哉さんは様々な職種・領域を超えて事業創出や研究開発を支援するお仕事をされているが、いけばなを客観視したお話を聞くことが出来た。

お話の多くはテクノロジーの過去・現在・未来について。過去のテクノロジーは予期せぬ出会いや発見が鍵となって生まれてきたが、新しいものを創造した人達に共通するのは柔らかな思考の持ち主であること。その柔らかな思考は身体感覚によるところが大きく、微妙な違いや変化を感じ取れ、我を通すことをせず周囲の変化を受け入れる柔軟さを持っていた。そういうものを育むのにいけばなはとても効果があるのではないか、というお話だった。

花をいける時、まず何も考えず手にした花を器にスッと入れて器と花の映りを確かめる事があるが、そんな時、花が意外な一面を見せてくれたりする。今まで見えていなかったものを偶然に見つける感じ。

こうしたいという気持ちが強い時よりも、花にどこにいきたいかを尋ねながらいけたほうが良い花になる事もある。花にゆだねる感覚。

考えることよりも感じることを優先する柔らかな思考が、未知の美を引き寄せているのだと思う。

花の命を相手にして、花と一緒に心地よい場をつくるいけばなは、花に新たな輝きを与える一方で、いける過程で、いけた後も、花が人に何らかの影響を与えている。

いける側が花の命を感じとり、その個性を器の上で活かすことができた時。器と花の絶妙な出逢いをつくれた時。いけた花がその場の空気を生き生きと変化させた時。いけばなの力、花本来の力、自然の力を感じる。そのような体験は人の感性を豊かにする。

固定観念に囚われず、多様なものを受け入れる柔らかな感性が、世の中をより良くする気付きや発見、出合いを生んできた。いけばなは異なる個性を持つ花々の命に触れることで、柔らかな感性を養うのに役立つ。

願わくば、これから未来を切り開いていこうとする人には是非ともいけばなを体験してほしい。無心に花と向きあっていると新たな気付きがきっとあるはずだ。その根本には互いの命を大切にする心が育まれているはずだ。

「自然の命に触れることができ、身体感覚の新たな発掘になる点で、いけばなは最先端ですよ！」西村勇哉

花をいけることは
花のいのちとふれあうこと
いのちの手ざわりが
ひとの感性をはぐくむ

『反集中』ＮＰＯ法人ミラツク編
2,970 円

22 人の起業家、経営者、研究者が多彩な視点から世界の見方を語る。

「反集中」とは、見ようとするものごとの輪郭をはっきりさせるために、その輪郭の外側を意識するアプローチ。

『反集中』特設サイトで 22 編全ての記事を無料で読める。

テキスト 718
2023 年 4 月

城南宮のしだれ梅

城南宮は平安京への遷都の際、都の南方・裏鬼門を守護するために創建され、のち白河天皇退位後の居所・鳥羽離宮の一部となって政治文化の中心となる。応仁の乱によって荒廃し江戸期に再建された。

3月10日に訪れると百五十本のしだれ梅が満開で様々な椿も咲き出していた。伸びやかに枝を広げるしだれ梅。花と人が作る景色に感動した。（仙溪）

テキスト 722
2023 年 8 月

「テキスト」10年分公開

「桑原専慶流いけばなテキスト」は1962年に始まって61年目になる。長きにわたる流内の皆様のご支援に厚く御礼申し上げます。

そんな蓄積を活用してもらいたくて、2012年まで50年分の花の写真と解説文をホームページに公開したのが3年前。誰でも何時でもご覧頂けます。

先々代、先代夫妻、そして現代。それぞれの花と文を見比べることもできます。月ごとにまとめてもあるので、ある季節のいけばなだけを眺めてもいただけます。

そして今回、その後の10年分も公開することにしました。年順、月順にまとめたものに加えて、仙溪、櫻子、健一郎それぞれの花と文を個別に見ることもできます。

また、「立華時勢粧を読む」の連載と、随時連載中の「器と花の痕跡」もまとめておきました。これらは自分自身が振り返るのに大変役に立っています。

流派のいけばなをまとまった形で記録に留めることができて感無量です。

これからも流派の皆さんのため発行を続けていきたいと思いますので、どうぞ宜しくお願い致します。

https://kuwaharasenkei.net
→「書籍・月刊誌」
→「桑原専慶流いけばなテキスト(2013~2022 年)」

花は野にあるように

仙溪

茶道においては茶席の花について、花は野にあるように挿すことを大切にされている。

この教えは「四規七則」と呼ばれている茶の湯（茶道）の精神と心得の中の一つである。

四規

和、敬、清、寂。

七則

茶は服のよきように
炭は湯の沸くように
花は野にあるように
夏は涼しく冬暖かに
刻限は早めに
降らずとも雨の用意
相客に心せよ

これらのことは日常においても人と接する上で大切な心の持ち様だと思う。華道を志す者としても身につけておくべきことだと思うので、裏千家ホームページの言葉を参考に解説したい。

「和」とは、お互いに心を開いて仲良くするということ。

「敬」とは、お互いに敬いあうという意味。

「清」とは、目に見える清らかさだけでなく、心の中も清らかであるということ。

「寂」とは、どんなときにも動じない心。

「茶は服のよきように」とは心をこめること。（服＝服む）

舌の先で美味しいと感じることだけでなく、一生懸命に点てたお茶を客がその気持ちも味わっていただくという、主と客との心の一体感を意味する。

「炭は湯の沸くように」とは本質を見極めること。

湯がよく沸くように火をおこすには上手な炭のつぎ方というものがあるが、形式だけのみこんだのでは火はつかない。本質をよく見極めることが大切。

「花は野にあるように」とは命を尊ぶこと。

自然そのままに再現するというのではなく、野に咲く花の美しさと自然から与えられた命の尊さを盛りこもうとすることに真の意味がある。

「夏は涼しく冬暖かに」とは季節感をもつこと。

茶道では季節感を大事にし、表現する。夏なら床に「涼一味」などの言葉をかけたり、冬なら蒸したての温かいお菓子を出すなど、自然の中に自分をとけこませるような工夫を。

「刻限は早めに」とは心にゆとりを持つこと。

ゆとりとは時間を尊重すること。自分がゆったりした気持ちになるだけでなく、相手の時間を大切にすることにもなる。そのときはじめて主と客が心を開いて向かい合える。

「降らずとも雨の用意」とは柔らかい心を持つこと。

どんなときにも落ち着いて行動できる心の準備と実際の用意をいつもすること。適切に場に応じられる、自由で素直な心を持つことが大切。

「相客に心せよ」とは互いに尊重しあうこと。

一緒に客になった者同士、互いを尊重しあい、楽しいひとときを過ごせるように。

いかがだろう。茶道ではこれらの教えを大切にされているが、私たちが花をいける時、花を教え教わる時、家に花をいけて客を迎える時にも、これらのことを意識するようにしたい。

さて、「花は野にあるように」という教えを、私ははじめお茶の世界での花の扱いであって、いけばなとは別物と考えていた。

いけばなには花を活かす型があるのだから素朴ないけ方の茶花とは違うのだ、などと表面的な違いに囚われていたことを今は恥ずかしく思っている。

「花は野にあるように」とは花に対する心のありようを言っているのであって、この言葉の持つ意味は華道の神髄でもあると今では思うようになった。

桑原専慶流の流祖、冨春軒仙溪は「立花秘傳抄…立花色の事」の中で、草木の出生玄妙体を瓶にうつすことを「色」と名付け、次のように言っている。

柳は緑、花は紅。

草木を自分の心にまかせていけたのでは、技巧が気になって出生の景気は得がたい。

思いを無にして心を草木にまかせ、真っ直ぐに、横に生ずるものは真っ直ぐに、横に生ずるものは横に遣う時、草木自然の体が顕れるものだ。

槖駝曰く
「以て能く木の天に順ひて、以て其の性を致すのみ」
（木の天然自然に従って、その生まれもった生きる働きを導くのみ）

この語花道の奥義によく相叶えり。誠に微細の教導、向上の一路なり。この境をよくよく工夫して修練止まざるときは、覚えずして色あるべし。

草木が本来持っている生きる働きをできるだけ損なわないようにしなさい。そうすれば自ずと草木は「命」をありありと輝き見せてくれるのだよと冨春軒は教えてくれている。

花に命の尊さを求める茶道の心と、華道の奥義はまったく同じである。

花の命を尊ぶ心を持っていたい。茶道に教わることは多い。

岡山県本部
総会・研修会

会期　7月29日㈯
会場　早島町ゆるびの舎
参加　60名

研修会では家元が「桑原専慶流のいけばな」をテーマに、日いけ中国展全出品作と、家元宅の花暮らしの様子を写真を見ながら解説。

またブランドコーディネーターの田中京子氏の講演では「変化と不変」をテーマにお話を聞いた。

田中氏によると日本には全世界の2％の企業があるが、百年以上の50％、二百年以上の65％を日本企業が占めているそうだ。その理由の1つに「不易流行」の精神がある。危機管理を怠らず、顧客のニーズに敏感で、伝統を継承しつつ柔軟に時代に対応している企業は残る。

いけばなの流派も同じで、まずは流派の「らしさ」を見つけ、見せ方、伝え方を工夫し、ファンを増やせばいい。ただし、「らしさ」は自分では気づきにくいので、流派のセールスポイントについてグループ毎に話し合ってみて下さい、と、参加者に宿題をいただき、最後にそれぞれ発表しあった。「家元がイケメンで優しい」「自然の姿を大切にしている」「花形は花材にあわせて臨機応変」「流内がファミリー的」「いけばなは指先を使うので元気のもと」「仲間と集えて楽しい」等々。皆さん楽しく真剣に話し合って下さったのが嬉しかった。今後に生かしたく思います。

仙溪